

木古内町

札苅7遺跡(2)

—高規格幹線道路函館江差自動車道工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—

令和4年度

公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター

例 言

1. 本書は、高規格幹線道路函館江差自動車道建設工事に伴い、公益財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成25～29年度に木古内町札苅7遺跡で実施した埋蔵文化財発掘調査のうち、主に平成28年度に検出した土器集中1～4について報告する。これ以外の遺構・遺物については、令和3年度に『木古内町札苅7遺跡（1）』（北埋調報368）として報告済みである。
2. 発掘調査は当該年度の担当課である第1調査部第3調査課が行った。整理作業は平成28年度に同課、平成29～令和元年度に第2調査部第1調査課、令和2・3年度に第1調査部第3調査課、令和4年度に第2調査部第1調査課が行った。
3. 整理作業は芝田直人が担当した。
4. 現場での写真撮影は吉田裕史洋が行い、空中写真の撮影を（株）シン技術コンサルへ委託した。室内での遺物撮影、写真図版の編集は第1調査部普及活用課の菊池慈人の協力を得た。
5. 各種分析は下記へ委託した。なお、各分析結果の一部は『木古内町札苅7遺跡（1）』（北埋調報368）に掲載済みである。

放射性炭素年代測定（AMS測定）：（株）加速器分析研究所

黒曜石製遺物の原産地推定：（株）パレオ・ラボ

6. 本書の執筆・編集は芝田が行った。
7. 調査の実施にあたり、下記の諸機関・諸氏の御教示・御協力をいただいたことを記して感謝する。（順不同、敬称略）

国土交通省北海道開発局函館開発建設部用地企画課、同部函館道路事務所

北海道教育庁生涯学習推進局文化財・博物館課

木古内町教育委員会：木元 豊

北斗市教育委員会：森 靖裕、時田太一郎

函館市教育委員会：佐藤智雄、福田裕二、小林 貢、野村祐一、吉田 力

知内町教育委員会：高橋豊彦、竹田 聡

七飯町教育委員会：山田 央

北海道考古学研究所：横山英介

大沼忠春、野村 崇

記号等の説明

1. 遺構の呼称について

遺構表記は『木古内町札苅7遺跡(1)』(北埋調報368)と共通・連番であるが、本報告では土器集中を記号で表記せず、焼土1か所のみFの略称を用いた。

2. 遺構図について

- (1) 遺跡・遺構の挿図の縮尺は任意であり、すべてスケールを付した。
- (2) 方位は方眼北(座標北)方向を遺構平面図に記号で示す。
- (3) 遺構平面図の「+」は5.0m方格の大グリッドラインまたは1.0m方格の小グリッドラインの交点で、傍らのアルファベット・アラビア数字は発掘区名である。
- (4) 遺構平面図の「・」付き小アラビア数字は、その地点の標高(単位m)を表す。
- (5) 土層の表記は、基本土層についてはローマ数字(I、II、III・・・)、遺構内の層序についてはアラビア数字(1、2、3・・・)を使用した。
- (6) 土層の色調は『新版標準土色帖29版』(小山・竹原2007)に準じた。
- (7) 火山灰は『北海道の火山灰』(北海道火山命名委員会1982)に準じ、以下の略称を用いた。
駒ヶ岳火山灰d層: K o - d (1640年降灰)、白頭山-苫小牧火山灰: B - T m (10世紀降灰)
- (8) 遺構の規模は「確認面での長軸長×確認面での短軸長×確認面からの最大厚」(単位m)で示した。掘削や遺構の重複等で破壊されている場合は、現存長に()を付した。

3. 遺物図について

- (1) 掲載遺物については基本的に下記の縮尺を用いた。各図にはスケールを付した。
土器: 1/3、剥片石器: 1/2、磨製石器・礫石器: 1/3・1/4、土製品・石製品: 1/2
- (2) 遺物図右下の太ゴシックアラビア数字は掲載番号であり、太ゴシックアラビア数字に後続する小文字アルファベット(a、b、c・・・)は同一個体を示す。
- (3) 土器図の「@」印は上面観を模式的に表したもので、十字の垂直線は下端が前面側-上端が裏面側を示し、十字の水平線は左端が左面側-右端が右面側をしめす。「@」印の直下の図は、「@」に太線で示した弧の範囲の文様・器面調整を図化表現している。太線は転写範囲を表わし、「@」印の外側に太線がある場合は外面の情報、「@」印の内側に太線がある場合は内面の情報を表現している。
- (4) 土器図に「▼」「▽」「◇」「△」が付されている場合、正面図に付されている「▼」「▽」「◇」「△」位置の断面を断面図に転写した。「▼」「▽」「◇」は正面側180°の範囲、「△」は裏面側180°の範囲を表す。
- (5) 土器正面図にある太ゴシックアラビア数字付き「┘」「└」は、露呈した粘土紐の接合面の位置・段数であり、それは断面図に対応する。「┘」は正面側180°の範囲、「└」は裏面側180°の範囲を表す。
- (6) 土器正面図に付されている「●:外傾接合」「○:内傾接合」は粘土紐の接合面の露呈部分を示し、「●」「○」:逆形は口縁部方向へ接続する面、「○」「●」:逆形は底部方向へ接続する面である。
- (7) 石器の実測図中でたたき痕は「V-V」、すり痕は「| - |」で範囲を示した。また、使用による光沢部分およびアスファルト付着部分、被熱の範囲をドットの網掛けで示した。
- (8) 石器・土製品・石製品の大きさは「最大長×最大幅×最大厚」で記してある。欠損しているものは現存長を丸括弧でくくって表し、計測不能は「—」と表した。

本文目次

口絵カラー	
例言	
記号等の説明	
本文目次	
挿図目次	
表目次	
写真図版目次	

I 緒 言

1 調査要項	1
2 調査体制	1
3 調査に至る経緯	3
(1) 函館江差自動車道の概要	
(2) 函館江差自動車道の調査の経緯	
(3) 札刈7遺跡の調査の経緯	
4 調査の経過	6
(1) 発掘調査	
(2) 整理作業	
5 調査結果の概要	9

II 調査の方法

1 発掘区の設定	15
(1) 遺跡の発掘区	
(2) 土器集中の発掘区	
2 掘削など	18
(1) 人力による調査	
(2) 調査における重機の併用	
(3) 濁水対策	
3 測量と記録	19
(1) 測量・図化	
(2) 現場での撮影	
4 資料整理	20
(1) 図面等	
(2) 出土品	
(3) 写真	
5 保管	20
6 遺物の分類	21
(1) 土器等	
(2) 石器等	
(3) その他の遺物	

III 遺跡の環境

1 立地と由来	23
(1) 所在と行政区分	
(2) 現況	
(3) 地名	
(4) 札刈地区の中・近世史	

2	地形と地質	26
	(1) 地形 (2) 地質 (3) 基本土層 (4) Ⅲ層の成因について	
	(5) B-TmとⅢ層の層序について	
3	周辺の遺跡	34
	(1) 木古内町における発掘調査 (2) 木古内町の縄文時代晩期遺跡	
	(3) 札幌地区の遺跡	

IV 遺構とその出土遺物

1	土器集中	43
	(1) 土器集中1 (2) 土器集中1出土の遺物	
	(3) 土器集中2 (4) 土器集中2出土の遺物	
	(5) 土器集中3 (6) 土器集中3出土の遺物	
	(7) 土器集中4 (8) 土器集中4出土の遺物	
2	焼土	343

V 包含層出土の遺物

1	概要	365
2	土器等	365
	(1) V群a類 (2) V群b類 (3) V群c類	

VI 自然科学的分析

1	札幌7遺跡における放射性炭素年代(AMS法)(1)	373
2	札幌7遺跡における放射性炭素年代(AMS法)(2)	380
3	札幌7遺跡出土黒曜石製石器の産地推定	387

VII 総括

1	土器集中の性格と形成過程	391
2	札幌7遺跡出土の縄文時代晩期前～中葉の土器群	393
3	まとめ	399

引用・参考文献	400
---------------	-----

写真図版

報告書抄録

挿図目次

図Ⅰ-1	道南の高速交通ネットワーク図	図Ⅳ-20	土器集中1 Ⅳ群c類土器出土位置図(2)
図Ⅰ-2	遺跡の位置	図Ⅳ-21	土器集中1 出土のⅤ群a類(1)
図Ⅰ-3	調査範囲と周辺の地形	図Ⅳ-22	土器集中1 出土のⅤ群a類(2)
図Ⅰ-4	遺構の位置(全体)	図Ⅳ-23	土器集中1 出土のⅤ群a類(3)
図Ⅰ-5	A地区 遺構の位置	図Ⅳ-24	土器集中1 出土のⅤ群a類(4)
図Ⅰ-6	B地区 遺構の位置	図Ⅳ-25	土器集中1 出土のⅤ群a類(5)
図Ⅱ-1	発掘区設定図(全体)	図Ⅳ-26	土器集中1 出土のⅤ群a類(6)
図Ⅱ-2	土器集中の発掘区設定図	図Ⅳ-27	土器集中1 出土のⅤ群a類(7)
図Ⅲ-1	遺跡の位置と木古内町の地形	図Ⅳ-28	土器集中1 出土のⅤ群a類(8)
図Ⅲ-2	木古内町周辺の地質	図Ⅳ-29	土器集中1 出土のⅤ群a類(9)
図Ⅲ-3	遺跡周辺の地形	図Ⅳ-30	土器集中1 出土のⅤ群a類(10)
図Ⅲ-4	周辺の地形(明治期・大正期)	図Ⅳ-31	土器集中1 出土のⅤ群a類(11)
図Ⅲ-5	基本土層柱状図	図Ⅳ-32	土器集中1 出土のⅤ群a類(12)
図Ⅲ-6	木古内町の遺跡	図Ⅳ-33	土器集中1 出土のⅤ群a類(13)
図Ⅲ-7	札苅地区の遺跡	図Ⅳ-34	土器集中1 出土のⅤ群a類(14)
図Ⅳ-1	土器集中1 上層出土状況図	図Ⅳ-35	土器集中1 出土のⅤ群a類(15)
図Ⅳ-2	土器集中1 下層出土状況図	図Ⅳ-36	土器集中1 出土のⅤ群a類(16)
図Ⅳ-3	土器集中1 最下層出土状況図	図Ⅳ-37	土器集中1 出土のⅤ群a類(17)
図Ⅳ-4	土器集中1 土層断面	図Ⅳ-38	土器集中1 出土のⅤ群a類(18)
図Ⅳ-5	土器集中1 出土のⅣ群c類(1)	図Ⅳ-39	土器集中1 出土のⅤ群a類(19)
図Ⅳ-6	土器集中1 出土のⅣ群c類(2)	図Ⅳ-40	土器集中1 出土のⅤ群a類(20)
図Ⅳ-7	土器集中1 出土のⅣ群c類(3)	図Ⅳ-41	土器集中1 出土のⅤ群a類(21)
図Ⅳ-8	土器集中1 出土のⅣ群c類(4)	図Ⅳ-42	土器集中1 出土のⅤ群a類(22)
図Ⅳ-9	土器集中1 出土のⅣ群c類(5)	図Ⅳ-43	土器集中1 出土のⅤ群a類(23)
図Ⅳ-10	土器集中1 出土のⅣ群c類(6)	図Ⅳ-44	土器集中1 出土のⅤ群a類(24)
図Ⅳ-11	土器集中1 出土のⅣ群c類(7)	図Ⅳ-45	土器集中1 出土のⅤ群a類(25)
図Ⅳ-12	土器集中1 出土のⅣ群c類(8)	図Ⅳ-46	土器集中1 出土のⅤ群a類(26)
図Ⅳ-13	土器集中1 出土のⅣ群c類(9)	図Ⅳ-47	土器集中1 出土のⅤ群a類(27)
図Ⅳ-14	土器集中1 出土のⅣ群c類(10)	図Ⅳ-48	土器集中1 出土のⅤ群a類(28)
図Ⅳ-15	土器集中1 出土のⅣ群c類(11)	図Ⅳ-49	土器集中1 出土のⅤ群a類(29)
図Ⅳ-16	土器集中1 出土のⅣ群c類(12)	図Ⅳ-50	土器集中1 出土のⅤ群a類(30)
図Ⅳ-17	土器集中1 出土のⅣ群c類(13)	図Ⅳ-51	土器集中1 出土のⅤ群a類(31)
図Ⅳ-18	土器集中1 出土のⅣ群c類(14)	図Ⅳ-52	土器集中1 出土のⅤ群a類(32)
図Ⅳ-19	土器集中1 Ⅳ群c類土器出土位置図(1)	図Ⅳ-53	土器集中1 出土のⅤ群a類(33)
		図Ⅳ-54	土器集中1 出土のⅤ群a類(34)
		図Ⅳ-55	土器集中1 出土のⅤ群a類(35)
		図Ⅳ-56	土器集中1 出土のⅤ群a類(36)

図Ⅳ-57 土器集中1出土のV群a類 (37)
 図Ⅳ-58 土器集中1出土のV群a類 (38)
 図Ⅳ-59 土器集中1出土のV群a類 (39)
 図Ⅳ-60 土器集中1出土のV群a類 (40)
 図Ⅳ-61 土器集中1出土のV群a類 (41)
 図Ⅳ-62 土器集中1出土のV群a類 (42)
 図Ⅳ-63 土器集中1出土のV群a類 (43)
 図Ⅳ-64 土器集中1出土のV群a類 (44)
 図Ⅳ-65 土器集中1出土のV群a類 (45)
 図Ⅳ-66 土器集中1出土のV群a類 (46)
 図Ⅳ-67 土器集中1出土のV群a類 (47)
 図Ⅳ-68 土器集中1出土のV群a類 (48)
 図Ⅳ-69 土器集中1出土のV群a類 (49)
 図Ⅳ-70 土器集中1出土のV群a類 (50)
 図Ⅳ-71 土器集中1出土のV群a類 (51)
 図Ⅳ-72 土器集中1出土のV群a類 (52)
 図Ⅳ-73 土器集中1出土のV群a類 (53)
 図Ⅳ-74 土器集中1出土のV群a類 (54)
 図Ⅳ-75 土器集中1出土のV群a類 (55)
 図Ⅳ-76 土器集中1出土のV群a類 (56)
 図Ⅳ-77 土器集中1出土のV群a類 (57)
 図Ⅳ-78 土器集中1出土のV群a類 (58)
 図Ⅳ-79 土器集中1出土のV群a類 (59)
 図Ⅳ-80 土器集中1出土のV群a類 (60)
 図Ⅳ-81 土器集中1出土のV群a類 (61)
 図Ⅳ-82 土器集中1出土のV群a類 (62)
 図Ⅳ-83 土器集中1出土のV群a類 (63)
 図Ⅳ-84 土器集中1出土のV群a類 (64)
 図Ⅳ-85 土器集中1出土のV群a類 (65)
 図Ⅳ-86 土器集中1出土のV群a類 (66)
 図Ⅳ-87 土器集中1出土のV群a類 (67)
 図Ⅳ-88 土器集中1出土のV群a類 (68)
 図Ⅳ-89 土器集中1出土のV群a類 (69)
 図Ⅳ-90 土器集中1出土のV群a類 (70)
 図Ⅳ-91 土器集中1出土のV群a類 (71)
 図Ⅳ-92 土器集中1出土のV群a類 (72)
 図Ⅳ-93 土器集中1出土のV群a類 (73)
 図Ⅳ-94 土器集中1 V群a類土器出土
位置図 (1)
 図Ⅳ-95 土器集中1 V群a類土器出土
位置図 (2)

図Ⅳ-96 土器集中1 V群a類土器出土
位置図 (3)
 図Ⅳ-97 土器集中1 V群a類土器出土
位置図 (4)
 図Ⅳ-98 土器集中1 V群a類土器出土
位置図 (5)
 図Ⅳ-99 土器集中1出土のV群b類 (1)
 図Ⅳ-100 土器集中1出土のV群b類 (2)
 図Ⅳ-101 土器集中1出土のV群b類 (3)
 図Ⅳ-102 土器集中1出土のV群b類 (4)
 図Ⅳ-103 土器集中1出土のV群b類 (5)
 図Ⅳ-104 土器集中1出土のV群b類 (6)
 図Ⅳ-105 土器集中1出土のV群b類 (7)
 図Ⅳ-106 土器集中1出土のV群b類 (8)
 図Ⅳ-107 土器集中1出土のV群b類 (9)
 図Ⅳ-108 土器集中1出土のV群b類 (10)
 図Ⅳ-109 土器集中1出土のV群b類 (11)
 図Ⅳ-110 土器集中1出土のV群b類 (12)
 図Ⅳ-111 土器集中1出土のV群b類 (13)
 図Ⅳ-112 土器集中1出土のV群b類 (14)
 図Ⅳ-113 土器集中1出土のV群b類 (15)
 図Ⅳ-114 土器集中1出土のV群b類 (16)
 図Ⅳ-115 土器集中1出土のV群b類 (17)
 図Ⅳ-116 土器集中1出土のV群b類 (18)
 図Ⅳ-117 土器集中1出土のV群b類 (19)
 図Ⅳ-118 土器集中1出土のV群b類 (20)
 図Ⅳ-119 土器集中1出土のV群b類 (21)
 図Ⅳ-120 土器集中1出土のV群b類 (22)
 図Ⅳ-121 土器集中1出土のV群b類 (23)
 図Ⅳ-122 土器集中1 V群b類土器出土
位置図 (1)
 図Ⅳ-123 土器集中1 V群b類土器出土
位置図 (2)
 図Ⅳ-124 土器集中1出土のV群c類 (1)
 図Ⅳ-125 土器集中1出土のV群c類 (2)
 図Ⅳ-126 土器集中1出土の土製品
 図Ⅳ-127 土器集中1出土の石器等 (1)
 図Ⅳ-128 土器集中1出土の石器等 (2)
 図Ⅳ-129 土器集中1出土の石器等 (3)
 図Ⅳ-130 土器集中1出土の石器等 (4)

- 図Ⅳ-131 土器集中1出土の石器等(5)
- 図Ⅳ-132 土器集中1出土の石器等(6)
- 図Ⅳ-133 土器集中1出土の石器等(7)
- 図Ⅳ-134 土器集中1 遺物分布図(1)
- 図Ⅳ-135 土器集中1 遺物分布図(2)
- 図Ⅳ-136 土器集中1 遺物分布図(3)
- 図Ⅳ-137 土器集中1 遺物分布図(4)
- 図Ⅳ-138 土器集中1 遺物分布図(5)
- 図Ⅳ-139 土器集中1 遺物分布図(6)
- 図Ⅳ-140 土器集中1 遺物分布図(7)
- 図Ⅳ-141 土器集中1 遺物分布図(8)
- 図Ⅳ-142 土器集中2 上層出土状況図
- 図Ⅳ-143 土器集中2 下層出土状況図
- 図Ⅳ-144 土器集中2 土層断面(1)
- 図Ⅳ-145 土器集中2 土層断面(2)
- 図Ⅳ-146 土器集中2出土のⅣ群c類(1)
- 図Ⅳ-147 土器集中2出土のⅣ群c類(2)
- 図Ⅳ-148 土器集中2出土のⅣ群c類(3)
- 図Ⅳ-149 土器集中2出土のⅣ群c類(4)
- 図Ⅳ-150 土器集中2 Ⅳ群c類土器出土位置図
- 図Ⅳ-151 土器集中2出土のⅤ群a類(1)
- 図Ⅳ-152 土器集中2出土のⅤ群a類(2)
- 図Ⅳ-153 土器集中2出土のⅤ群a類(3)
- 図Ⅳ-154 土器集中2出土のⅤ群a類(4)
- 図Ⅳ-155 土器集中2出土のⅤ群a類(5)
- 図Ⅳ-156 土器集中2出土のⅤ群a類(6)
- 図Ⅳ-157 土器集中2出土のⅤ群a類(7)
- 図Ⅳ-158 土器集中2出土のⅤ群a類(8)
- 図Ⅳ-159 土器集中2出土のⅤ群a類(9)
- 図Ⅳ-160 土器集中2 Ⅴ群a類土器出土位置図
- 図Ⅳ-161 土器集中2出土のⅤ群b類(1)
- 図Ⅳ-162 土器集中2出土のⅤ群b類(2)
- 図Ⅳ-163 土器集中2出土のⅤ群b類(3)
- 図Ⅳ-164 土器集中2出土のⅤ群b類(4)
- 図Ⅳ-165 土器集中2出土のⅤ群b類(5)
- 図Ⅳ-166 土器集中2出土のⅤ群b類(6)
- 図Ⅳ-167 土器集中2出土のⅤ群b類(7)
- 図Ⅳ-168 土器集中2出土のⅤ群b類(8)
- 図Ⅳ-169 土器集中2出土のⅤ群b類(9)
- 図Ⅳ-170 土器集中2出土のⅤ群b類(10)
- 図Ⅳ-171 土器集中2出土のⅤ群b類(11)
- 図Ⅳ-172 土器集中2出土のⅤ群b類(12)
- 図Ⅳ-173 土器集中2出土のⅤ群b類(13)
- 図Ⅳ-174 土器集中2出土のⅤ群b類(14)
- 図Ⅳ-175 土器集中2出土のⅤ群b類(15)
- 図Ⅳ-176 土器集中2出土のⅤ群b類(16)
- 図Ⅳ-177 土器集中2出土のⅤ群b類(17)
- 図Ⅳ-178 土器集中2出土のⅤ群b類(18)
- 図Ⅳ-179 土器集中2出土のⅤ群b類(19)
- 図Ⅳ-180 土器集中2出土のⅤ群b類(20)
- 図Ⅳ-181 土器集中2出土のⅤ群b類(21)
- 図Ⅳ-182 土器集中2出土のⅤ群b類(22)
- 図Ⅳ-183 土器集中2出土のⅤ群b類(23)
- 図Ⅳ-184 土器集中2出土のⅤ群b類(24)
- 図Ⅳ-185 土器集中2出土のⅤ群b類(25)
- 図Ⅳ-186 土器集中2出土のⅤ群b類(26)
- 図Ⅳ-187 土器集中2出土のⅤ群b類(27)
- 図Ⅳ-188 土器集中2出土のⅤ群b類(28)
- 図Ⅳ-189 土器集中2出土のⅤ群b類(29)
- 図Ⅳ-190 土器集中2出土のⅤ群b類(30)
- 図Ⅳ-191 土器集中2出土のⅤ群b類(31)
- 図Ⅳ-192 土器集中2出土のⅤ群b類(32)
- 図Ⅳ-193 土器集中2出土のⅤ群b類(33)
- 図Ⅳ-194 土器集中2出土のⅤ群b類(34)
- 図Ⅳ-195 土器集中2出土のⅤ群b類(35)
- 図Ⅳ-196 土器集中2出土のⅤ群b類(36)
- 図Ⅳ-197 土器集中2出土のⅤ群b類(37)
- 図Ⅳ-198 土器集中2出土のⅤ群b類(38)
- 図Ⅳ-199 土器集中2 Ⅴ群b類土器出土位置図(1)
- 図Ⅳ-200 土器集中2 Ⅴ群b類土器出土位置図(2)
- 図Ⅳ-201 土器集中2 Ⅴ群b類土器出土位置図(3)
- 図Ⅳ-202 土器集中2出土のⅤ群c類
- 図Ⅳ-203 土器集中2出土のⅥ群a類(1)
- 図Ⅳ-204 土器集中2出土のⅥ群a類(2)
- 図Ⅳ-205 土器集中2出土のⅥ群a類(3)
- 図Ⅳ-206 土器集中2 Ⅴ群c類・Ⅵ群a類土器出土位置図

- 図Ⅳ-207 土器集中2出土の土製品
 図Ⅳ-208 土器集中2出土の石器等(1)
 図Ⅳ-209 土器集中2出土の石器等(2)
 図Ⅳ-210 土器集中2出土の石器等(3)
 図Ⅳ-211 土器集中2出土の石器等(4)
 図Ⅳ-212 土器集中2出土の石器等(5)
 図Ⅳ-213 土器集中2出土の石器等(6)
 図Ⅳ-214 土器集中2出土の石器等(7)
 図Ⅳ-215 土器集中2 遺物分布図(1)
 図Ⅳ-216 土器集中2 遺物分布図(2)
 図Ⅳ-217 土器集中2 遺物分布図(3)
 図Ⅳ-218 土器集中2 遺物分布図(4)
 図Ⅳ-219 土器集中2 遺物分布図(5)
 図Ⅳ-220 土器集中2 遺物分布図(6)
 図Ⅳ-221 土器集中2 遺物分布図(7)
 図Ⅳ-222 土器集中2 遺物分布図(8)
 図Ⅳ-223 土器集中3 上層出土状況図
 図Ⅳ-224 土器集中3 下層出土状況図
 図Ⅳ-225 土器集中3 土層断面
 図Ⅳ-226 土器集中3出土のⅣ群c類
 図Ⅳ-227 土器集中3出土のⅤ群a類(1)
 図Ⅳ-228 土器集中3出土のⅤ群a類(2)
 図Ⅳ-229 土器集中3出土のⅤ群a類(3)
 図Ⅳ-230 土器集中3出土のⅤ群a類(4)
 図Ⅳ-231 土器集中3出土のⅤ群a類(5)
 図Ⅳ-232 土器集中3出土のⅤ群a類(6)
 図Ⅳ-233 土器集中3出土のⅤ群a類(7)
 図Ⅳ-234 土器集中3出土のⅤ群a類(8)
 図Ⅳ-235 土器集中3出土のⅤ群b類
 図Ⅳ-236 土器集中3出土のⅤ群c類(1)
 図Ⅳ-237 土器集中3出土のⅤ群c類(2)
 図Ⅳ-238 土器集中3出土の土製品
 図Ⅳ-239 土器集中3出土の石器等(1)
 図Ⅳ-240 土器集中3出土の石器等(2)
 図Ⅳ-241 土器集中3出土の石器等(3)
 図Ⅳ-242 土器集中3 遺物分布図(1)
 図Ⅳ-243 土器集中3 遺物分布図(2)
 図Ⅳ-244 土器集中3 遺物分布図(3)
 図Ⅳ-245 土器集中3 遺物分布図(4)
 図Ⅳ-246 土器集中3 遺物分布図(5)
 図Ⅳ-247 土器集中3 遺物分布図(6)
 図Ⅳ-248 土器集中3 遺物分布図(7)
 図Ⅳ-249 土器集中4 範囲推定図
 図Ⅳ-250 土器集中4出土のⅤ群a類(1)
 図Ⅳ-251 土器集中4出土のⅤ群a類(2)
 図Ⅳ-252 土器集中4出土のⅤ群b類(1)
 図Ⅳ-253 土器集中4出土のⅤ群b類(2)
 図Ⅳ-254 土器集中4出土のⅤ群b類(3)
 図Ⅳ-255 土器集中4出土のⅤ群b類(4)
 図Ⅳ-256 土器集中4出土のⅤ群b類(5)
 図Ⅳ-257 土器集中4出土のⅤ群b類(6)
 図Ⅳ-258 土器集中4出土のⅤ群b類(7)
 図Ⅳ-259 土器集中4出土のⅤ群b類(8)
 図Ⅳ-260 土器集中4出土のⅤ群b類(9)
 図Ⅳ-261 土器集中4出土のⅤ群b類(10)
 図Ⅳ-262 土器集中4出土のⅤ群b類(11)
 図Ⅳ-263 土器集中4出土のⅤ群b類(12)
 図Ⅳ-264 土器集中4出土のⅤ群b類(13)
 図Ⅳ-265 土器集中4出土のⅤ群b類(14)
 図Ⅳ-266 土器集中4出土のⅤ群b類(15)
 図Ⅳ-267 土器集中4出土のⅤ群b類(16)
 図Ⅳ-268 土器集中4出土のⅤ群b類(17)
 図Ⅳ-269 土器集中4出土のⅤ群b類(18)
 図Ⅳ-270 土器集中4出土のⅤ群b類(19)
 図Ⅳ-271 土器集中4出土のⅤ群b類(20)
 図Ⅳ-272 土器集中4出土のⅤ群b類(21)
 図Ⅳ-273 土器集中4出土のⅤ群b類(22)
 図Ⅳ-274 土器集中4出土のⅤ群b類(23)
 図Ⅳ-275 土器集中4出土のⅤ群c類(1)
 図Ⅳ-276 土器集中4出土のⅤ群c類(2)
 図Ⅳ-277 土器集中4出土のⅤ群c類(3)
 図Ⅳ-278 F-34
 図Ⅴ-1 包含層出土のⅤ群土器(1)
 図Ⅴ-2 包含層出土のⅤ群土器(2)
 図Ⅴ-3 包含層出土のⅤ群土器(3)
 図Ⅴ-4 包含層出土土器分布図(1)
 図Ⅴ-5 包含層出土土器分布図(2)
 図Ⅴ-6 包含層出土土器分布図(3)

表目次

表Ⅰ-1	年度別遺構数・遺物点数一覧	表Ⅳ-12	土器集中3	V群b類掲載土器一覧	
表Ⅰ-2	出土土器点数一覧	表Ⅳ-13	土器集中3	V群c類掲載土器一覧	
表Ⅰ-3	出土石器等重点数一覧	表Ⅳ-14	土器集中4	V群a類掲載土器一覧	
		表Ⅳ-15	土器集中4	V群b類掲載土器一覧	
表Ⅲ-1	木古内町遺跡一覧（1）	表Ⅳ-16	土器集中4	V群c類掲載土器一覧	
表Ⅲ-2	木古内町遺跡一覧（2）	表Ⅳ-17	土器集中1	掲載土製品一覧	
		表Ⅳ-18	土器集中2	掲載土製品一覧	
表Ⅳ-1	土器集中1	Ⅳ群c類掲載土器一覧	表Ⅳ-19	土器集中3	掲載土製品一覧
表Ⅳ-2	土器集中1	V群a類掲載土器一覧	表Ⅳ-20	土器集中1	掲載石器等一覧
表Ⅳ-3	土器集中1	V群b類掲載土器一覧	表Ⅳ-21	土器集中2	掲載石器等一覧
表Ⅳ-4	土器集中1	V群c類掲載土器一覧	表Ⅳ-22	土器集中3	掲載石器等一覧
表Ⅳ-5	土器集中2	Ⅳ群c類掲載土器一覧	表Ⅳ-23	土器集中1	出土遺物一覧
表Ⅳ-6	土器集中2	V群a類掲載土器一覧	表Ⅳ-24	土器集中2	出土遺物一覧
表Ⅳ-7	土器集中2	V群b類掲載土器一覧	表Ⅳ-25	土器集中3	出土遺物一覧
表Ⅳ-8	土器集中2	V群c類掲載土器一覧			
表Ⅳ-9	土器集中2	Ⅵ群a類掲載土器一覧	表Ⅴ-1	包含層	V群a類掲載土器一覧
表Ⅳ-10	土器集中3	Ⅳ群c類掲載土器一覧	表Ⅴ-2	包含層	V群b類掲載土器一覧
表Ⅳ-11	土器集中3	V群a類掲載土器一覧	表Ⅴ-3	包含層	V群c類掲載土器一覧

写真図版目次

図版 1	調査前・調査状況	図版 35	土器集中 1 出土の V 群 a 類 (21)
図版 2	土器集中 1 (1)	図版 36	土器集中 1 出土の V 群 a 類 (22)
図版 3	土器集中 1 (2)	図版 37	土器集中 1 出土の V 群 a 類 (23)
図版 4	土器集中 2 (1)	図版 38	土器集中 1 出土の V 群 a 類 (24)
図版 5	土器集中 2 (2)	図版 39	土器集中 1 出土の V 群 a 類 (25)
図版 6	土器集中 3 (1)	図版 40	土器集中 1 出土の V 群 a 類 (26)
図版 7	土器集中 3 (2)	図版 41	土器集中 1 出土の V 群 a 類 (27)
図版 8	F-34・調査終了	図版 42	土器集中 1 出土の V 群 a 類 (28)
図版 9	土器集中 1 出土の IV 群 c 類 (1)	図版 43	土器集中 1 出土の V 群 a 類 (29)
図版 10	土器集中 1 出土の IV 群 c 類 (2)	図版 44	土器集中 1 出土の V 群 a 類 (30)
図版 11	土器集中 1 出土の IV 群 c 類 (3)	図版 45	土器集中 1 出土の V 群 a 類 (31)
図版 12	土器集中 1 出土の IV 群 c 類 (4)	図版 46	土器集中 1 出土の V 群 a 類 (32)
図版 13	土器集中 1 出土の IV 群 c 類 (5)	図版 47	土器集中 1 出土の V 群 a 類 (33)
図版 14	土器集中 1 出土の IV 群 c 類 (6)	図版 48	土器集中 1 出土の V 群 a 類 (34)
図版 15	土器集中 1 出土の IV 群 c 類 (7)	図版 49	土器集中 1 出土の V 群 a 類 (35)
	土器集中 1 出土の V 群 a 類 (1)	図版 50	土器集中 1 出土の V 群 a 類 (36)
図版 16	土器集中 1 出土の V 群 a 類 (2)	図版 51	土器集中 1 出土の V 群 b 類 (1)
図版 17	土器集中 1 出土の V 群 a 類 (3)	図版 52	土器集中 1 出土の V 群 b 類 (2)
図版 18	土器集中 1 出土の V 群 a 類 (4)	図版 53	土器集中 1 出土の V 群 b 類 (3)
図版 19	土器集中 1 出土の V 群 a 類 (5)	図版 54	土器集中 1 出土の V 群 b 類 (4)
図版 20	土器集中 1 出土の V 群 a 類 (6)	図版 55	土器集中 1 出土の V 群 b 類 (5)
図版 21	土器集中 1 出土の V 群 a 類 (7)	図版 56	土器集中 1 出土の V 群 b 類 (6)
図版 22	土器集中 1 出土の V 群 a 類 (8)	図版 57	土器集中 1 出土の V 群 b 類 (7)
図版 23	土器集中 1 出土の V 群 a 類 (9)	図版 58	土器集中 1 出土の V 群 b 類 (8)
図版 24	土器集中 1 出土の V 群 a 類 (10)	図版 59	土器集中 1 出土の V 群 b 類 (9)
図版 25	土器集中 1 出土の V 群 a 類 (11)	図版 60	土器集中 1 出土の V 群 b 類 (10)
図版 26	土器集中 1 出土の V 群 a 類 (12)	図版 61	土器集中 1 出土の V 群 b 類 (11)
図版 27	土器集中 1 出土の V 群 a 類 (13)	図版 62	土器集中 1 出土の V 群 b 類 (12)
図版 28	土器集中 1 出土の V 群 a 類 (14)	図版 63	土器集中 1 出土の V 群 b 類 (13)
図版 29	土器集中 1 出土の V 群 a 類 (15)		土器集中 1 出土の V 群 c 類
図版 30	土器集中 1 出土の V 群 a 類 (16)	図版 64	土器集中 2 出土の IV 群 c 類 (1)
図版 31	土器集中 1 出土の V 群 a 類 (17)	図版 65	土器集中 2 出土の IV 群 c 類 (2)
図版 32	土器集中 1 出土の V 群 a 類 (18)	図版 66	土器集中 2 出土の IV 群 c 類 (3)
図版 33	土器集中 1 出土の V 群 a 類 (19)		土器集中 2 出土の V 群 a 類 (1)
図版 34	土器集中 1 出土の V 群 a 類 (20)	図版 67	土器集中 2 出土の V 群 a 類 (2)

- 図版 68 土器集中 2 出土の V 群 a 類 (3)
 図版 69 土器集中 2 出土の V 群 a 類 (4)
 図版 70 土器集中 2 出土の V 群 a 類 (5)
 図版 71 土器集中 2 出土の V 群 a 類 (6)
 土器集中 2 出土の V 群 b 類 (1)
 図版 72 土器集中 2 出土の V 群 b 類 (2)
 図版 73 土器集中 2 出土の V 群 b 類 (3)
 図版 74 土器集中 2 出土の V 群 b 類 (4)
 図版 75 土器集中 2 出土の V 群 b 類 (5)
 図版 76 土器集中 2 出土の V 群 b 類 (6)
 図版 77 土器集中 2 出土の V 群 b 類 (7)
 図版 78 土器集中 2 出土の V 群 b 類 (8)
 図版 79 土器集中 2 出土の V 群 b 類 (9)
 図版 80 土器集中 2 出土の V 群 b 類 (10)
 図版 81 土器集中 2 出土の V 群 b 類 (11)
 図版 82 土器集中 2 出土の V 群 b 類 (12)
 図版 83 土器集中 2 出土の V 群 b 類 (13)
 図版 84 土器集中 2 出土の V 群 b 類 (14)
 図版 85 土器集中 2 出土の V 群 b 類 (15)
 図版 86 土器集中 2 出土の V 群 b 類 (16)
 図版 87 土器集中 2 出土の V 群 b 類 (17)
 図版 88 土器集中 2 出土の V 群 b 類 (18)
 図版 89 土器集中 2 出土の V 群 b 類 (19)
 図版 90 土器集中 2 出土の V 群 b 類 (20)
 土器集中 2 出土の V 群 c 類
 図版 91 土器集中 2 出土の VI 群 a 類
 図版 92 土器集中 3 出土の IV 群 c 類
 土器集中 3 出土の V 群 a 類 (1)
 図版 93 土器集中 3 出土の V 群 a 類 (2)
 図版 94 土器集中 3 出土の V 群 a 類 (3)
 図版 95 土器集中 3 出土の V 群 a 類 (4)
 図版 96 土器集中 3 出土の V 群 a 類 (5)
 土器集中 3 出土の V 群 b 類
 図版 97 土器集中 3 出土の V 群 c 類
 図版 98 土器集中 4 出土の V 群 a 類
 図版 99 土器集中 4 出土の V 群 b 類 (1)
 図版 100 土器集中 4 出土の V 群 b 類 (2)
 図版 101 土器集中 4 出土の V 群 b 類 (3)
 図版 102 土器集中 4 出土の V 群 b 類 (4)
 図版 103 土器集中 4 出土の V 群 b 類 (5)
 図版 104 土器集中 4 出土の V 群 b 類 (6)
 図版 105 土器集中 4 出土の V 群 b 類 (7)
 図版 106 土器集中 4 出土の V 群 b 類 (8)
 図版 107 土器集中 4 出土の V 群 b 類 (9)
 図版 108 土器集中 4 出土の V 群 b 類 (10)
 図版 109 土器集中 4 出土の V 群 b 類 (11)
 土器集中 4 出土の V 群 c 類 (1)
 図版 110 土器集中 4 出土の V 群 c 類 (2)
 包含層出土の V 群 (1)
 図版 111 包含層出土の V 群 (2)
 図版 112 土器集中 1 出土の土製品
 土器集中 2 出土の土製品
 土器集中 3 出土の土製品
 土器集中 1 出土の石器等 (1)
 図版 113 土器集中 1 出土の石器等 (2)
 図版 114 土器集中 1 出土の石器等 (3)
 図版 115 土器集中 1 出土の石器等 (4)
 土器集中 2 出土の石器等 (1)
 図版 116 土器集中 2 出土の石器等 (2)
 図版 117 土器集中 2 出土の石器等 (3)
 図版 118 土器集中 3 出土の石器等



調査区遠景



調査状況

口絵2



土器集中1 遺物出土状況



土製品・石製品 (S=1/2)

I 緒言

1 調査要項

事業名	高規格幹線道路函館江差自動車道工事用地内埋蔵文化財発掘調査 *平成25・26年度は(大平4遺跡外)、平成27・28年度は(泉沢6遺跡外)、平成29年度は(幸連5遺跡外)が末尾に付帯する。
事業委託者	国土交通省北海道開発局函館開発建設部
事業受託者	公益財団法人北海道埋蔵文化財センター
遺跡名	札苺7遺跡(北海道教育委員会登録番号:B-05-50)
所在地	北海道上磯郡木古内町字札苺411-2、412-2、576-1・11・13、578-11、580-2
調査期間	平成25年4月1日～平成26年3月31日(発掘期間5月13日～11月8日) 平成26年4月1日～平成27年3月31日(発掘期間5月15日～10月31日) 平成27年4月1日～平成28年3月31日(発掘期間5月12日～7月31日) 平成28年4月1日～平成29年3月31日(発掘期間6月21日～10月14日) 平成29年4月1日～平成30年3月31日(発掘期間5月8日～10月27日) 平成30年4月1日～平成31年3月31日(整理期間) 平成31年4月1日～令和2年3月31日(整理期間) 令和2年4月1日～令和3年3月31日(整理期間) 令和3年4月1日～令和4年3月31日(整理期間) 令和4年4月1日～令和5年3月31日(整理期間)
調査面積	平成25年度:10,690㎡ 平成26年度:1,295㎡ 平成27年度:1,000㎡ 平成28年度:1,809㎡ 平成29年度:893㎡ <総面積>15,687㎡

2 調査体制

平成25年度	理事長	坂本 均
	副理事長	畑 宏 明
	事務局長	中 田 仁(専務理事兼任)
	第1調査部	部長 千葉 英 一(常務理事兼任)
	第1調査部第3調査課	課長 土 肥 研 晶(発掘担当者)
	同	主査 袖 岡 淳 子(発掘担当者)
	同	主任 佐 藤 和 雄(発掘担当者)
	同	嘱託 奥 山 さ と み
平成26年度	理事長	坂本 均
	副理事長	畑 宏 明(平成26年8月28日死去)
	事務局長	中 田 仁(専務理事兼任)
	第1調査部	部長 千葉 英 一(常務理事兼任)

平成27年度	第1調査部第3調査課	課長	土肥研晶	
	同	主査	立川トマス(発掘担当者)	
	同	主査	芝田直人(発掘担当者)	
	同	主査	直江康雄(発掘担当者)	
	同	嘱託	渡井 瞳	
	第1調査部第1調査課	主査	吉田裕吏洋(7月25日まで)	
	理事長		坂本 均(6月26日まで)	
			越田賢一郎(6月26日から)	
	副理事長		中田 仁(6月26日から)	
	事務局長		山田寿雄(専務理事兼任)	
	第1調査部	部長	長沼 孝(常務理事兼任)	
	第1調査部第3調査課	課長	土肥研晶	
	同	主査	袖岡 淳子(発掘担当者)	
	同	主査	芝田直人(発掘担当者)	
	同	主査	直江康雄(発掘担当者)	
平成28年度	理事長		越田賢一郎	
	副理事長		中田 仁	
	事務局長		山田寿雄(専務理事兼任)	
	第1調査部	部長	長沼 孝(常務理事兼任)	
	第1調査部第3調査課	課長	土肥研晶	
	同	主査	袖岡 淳子(発掘担当者)	
	同	主査	芝田直人(発掘担当者)	
	同	主査	吉田裕吏洋(発掘担当者)	
	理事長		越田賢一郎	
	副理事長		中田 仁	
	事務局長		山田寿雄(専務理事兼任)	
	常務理事		長沼 孝(第1調査部長兼任)	
	第2調査部	部長	鈴木 信	
	第2調査部第1調査課	課長	鎌田 望(発掘担当者)	
	同	主査	袖岡 淳子(発掘担当者)	
	同	主査	佐藤 剛(発掘担当者)	
	同	主任	熊谷 仁志(発掘担当者)	
平成29年度	理事長		越田賢一郎	
	副理事長		中田 仁	
	事務局長		山田寿雄(専務理事兼任)	
	常務理事		長沼 孝(第1調査部長兼任)	
	第2調査部	部長	鈴木 信	
	第2調査部第1調査課	課長	鎌田 望(発掘担当者)	
	同	主査	芝田直人	
	同	主査	袖岡 淳子	
	理事長		越田賢一郎	
	副理事長		中田 仁	
	事務局長		山田寿雄(専務理事兼任)	
	常務理事		長沼 孝(第1調査部長兼任)	
	第2調査部	部長	鈴木 信	
	第2調査部第1調査課	課長	鎌田 望(発掘担当者)	
	同	主査	芝田直人	
	同	主査	袖岡 淳子	

平成31年度 (令和元年度)	理事長	越田賢一郎(6月21日まで)
		長沼孝(6月21日から)
	事務局長	山田寿雄(専務理事兼任)
	常務理事	鈴木信(第1調査部長兼任)
	第2調査部 部長	村田大
令和2年度	第2調査部第1調査課 課長	鎌田望
	同 主査	芝田直人
	同 主査	袖岡淳子
	理事長	長沼孝
	事務局長	山田寿雄(専務理事兼任)
令和3年度	第1調査部 部長	鈴木信(常務理事兼任)
	第1調査部第3調査課 課長	鈴木宏行
	同 主査	芝田直人
	同 主査	袖岡淳子
	理事長	長沼孝
令和4年度	事務局長	馬橋功(専務理事・総務部長兼任)
	第1調査部 部長	鈴木信(常務理事兼任)
	第1調査部第3調査課 課長	鈴木宏行
	同 主査	芝田直人
	同 主査	袖岡淳子
令和5年度	理事長	長沼孝
	事務局長	馬橋功(専務理事・総務部長兼任)
	常務理事	鈴木信(第1調査部長兼任)
	第2調査部 部長	村田大
	第2調査部第1調査課 課長	鈴木宏行
	同 主査	芝田直人

3 調査にいたる経緯

(1) 函館江差自動車道の概要

「函館・江差自動車道」は函館新道函館インターチェンジ(IC)を起点とし、北斗市・木古内町・上ノ国町を経由し、日本海側の江差町へと至る延長約70kmの自動車専用道路である。この路線の主な建設目的は、近隣主要都市間の交流の促進、重要港湾函館港や拠点空港函館空港等への物流の効率化、生活の利便性の向上にある。北海道縦貫自動車道、函館新道、函館新外環状道路等と一体となって高速ネットワークを形成し、平成28(2016)年3月に開業した北海道新幹線(新青森-新函館北斗間)との連絡から観光への効果も期待されている。また、緊急医療搬送や災害、異常気象時の代替路としての役割も担っている。

「函館・江差自動車道」のうち、現在までに「函館茂辺地道路」と「茂辺地木古内道路」が事業化されている。「函館茂辺地道路」は函館市桔梗町を起点とし、北斗市茂辺地を終点とする延長約18kmの道路で、平成2(1990)年度に事業化された。平成15(2003)年3月に函館IC～北斗中央IC(旧上磯IC)、平成21(2009)年11月に北斗中央IC～北斗富川IC、平成24(2012)年3月に北



図 I-2 遺跡の位置

により調査された。北斗市では、平成14～17(2002～2005)年度の押上1遺跡に始まり、平成22～26(2010～2014)年度の茂辺地4遺跡、平成25・26(2013・2014)年度の村前ノ沢遺跡まで計14遺跡が調査された。調査主体はセンター、北斗市(旧上磯町)教育委員会、特定非営利活動法人函館市埋蔵文化財事業団(平成27年度から一般財団法人道南歴史文化振興財団へ移行)がある。茂辺地4遺跡は年度により、これらの3組織が順次調査を行った。木古内町では、平成23・24(2011・2012)年度の釜谷8遺跡、平成23・29(2011・2017)年度の札苅5遺跡、平成23(2011)年度の札苅6遺跡に始まり、平成28～令和元(2016～2019)年度の幸連5遺跡まで、計15遺跡がセンターにより調査された。遺跡ごとの調査面積では、北斗市茂辺地4遺跡の20,281㎡が最も広く、同押上1遺跡の19,355㎡、木古内町札苅7遺跡の15,687㎡、同大平4遺跡の15,593㎡が順に次ぐ。

(3) 札苅7遺跡の調査の経緯

函館開建は平成11(1999)年に、茂辺地木古内道路の木古内町大釜谷から大平までの範囲にける埋蔵文化財包蔵地に関する事前協議書を道教委へ提出した。それを受けて道教委は周知の包蔵地を含む15地点について所在確認調査が必要と通知した。平成20(2008)年10月、道教委は木古内町において現地踏査を実施し、路線内の可能性の試掘調査が必要と判断した。平成21(2009)年2月26日付で、函館開建より道教委へ、茂辺地木古内道路の幸連工区にかかる埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについての事前協議がなされた。これにより平成22(2010)年11月10・11日、道教委は札苅地区で試掘調査を実施した。建設予定用地内の本線SP30500～30800付近の約300m間で34か所の試掘坑を設けた。その結果、SP30500付近で札苅5遺跡、SP30800付近で札苅6遺跡、さらに付近の踏査で試掘範囲より約100m西側のSP30900付近で札苅7遺跡が新たに発見された。同年12月7日付で、道教委は札苅5遺跡と札苅6遺跡について発掘調査、札苅7遺跡について試掘調査が必要であると函館開建へ回答した。以上の経緯から、平成23(2011)年度、センターが函館開建より事業を受託し、札苅5遺跡(3,393㎡)と札苅6遺跡(2,758㎡)の調査を実施した(北埋調報294・301)。札苅5遺跡は、平成29(2017)年度にも本線の一部と本線に重複する札苅林道下部分の計770㎡が調査されている(北埋調報353)。

平成24(2012)年10月23～25日、木古内町教育委員会が函館開建函館道路事務所の立会のもと、札苅7遺跡の試掘調査を実施した。建設予定用地内の本線SP30820～31120付近の約300m間で33か所の試掘坑を設けた。ただし、東西両端の沢や札苅林道下には試掘坑は設定できなかった。また、北海道新幹線札苅トンネル建設のための作業道により包含層の一部が掘開されていた。これらを除き、試掘調査範囲のほぼ全体で遺構・遺物が確認されたことから、16,512㎡が要発掘調査範囲と判断された。この結果を受けて、同年11月9日付で道教委は函館開建へ札苅7遺跡については発掘調査が必要であると回答した。以上の経緯から、平成25(2013)年2月に道教委よりセンターへ札苅7遺跡の発掘指示があった。平成25(2013)年度、センターは函館開建より事業を受託し、発掘調査に着手した。

4 調査の経過

(1) 発掘調査

平成25年度

調査計画を策定するに当たって、調査範囲が広大であるため、便宜的に地区割を行った。札苅林道より南下する作業道を境として、東側の札苅6遺跡に隣接する部分をA地区(3,925㎡)とした。西側については、試掘調査の結果から予想される遺構・遺物の濃淡により、B・C・D地区に分別し

た。札幌林道より南側の、調査範囲の中央部にあたる緩斜面をB地区（4,275㎡）、札幌林道を挟み、西端の沢へ続く氾濫原～斜面をC地区（4,700㎡）、札幌林道より北側の、標高350 m以上の急斜面をD地区（1,850㎡）とした。

調査は5～11月にB・C・D地区の計10,825㎡を対象に行われ、縄文時代後期後葉を主体とする遺構・遺物が多数検出された。また、A地区の西側（作業道側）法面に露呈していた竪穴住居跡が崩壊する恐れがあったため、急遽これにかかる遺構部分のみ調査した。担当課は併行して大平遺跡（北埋調報329）、大平4遺跡（北埋調報331）の調査も行った。用地未買収による除外や求積誤差により、平成25（2013）年度の札幌7遺跡の最終的な調査面積は10,690㎡となった。調査終了後、B・C・D地区を統合し、作業道より西側は札幌林道下も含め、すべて「B地区」と呼称することとした。

平成26年度

A地区は前年度の測量成果に基づく求積により、面積が3,606㎡へと修正された。調査はA地区の完掘を計画して5月に着手した。地形的な制約（沢を含む急斜面）と発掘排土を作業道側より搬出する都合により、西側から調査を開始し、縄文時代中・後期を主体とする遺構・遺物が多数検出された。

調査範囲内の沢は水量が多く、低位部分の遺構調査等に支障が生じることがあった。試掘調査によれば、沢尻付近は攪乱のため遺物包含層が失われているとされていたことから、重機により地表面から約1.5 mの深さの釜場を掘削した。すると、南東側の氾濫原が付近の札幌トンネル工事で生じた大量のズリ（岩石碎片）により充填されており、その下部に縄文時代晩期の遺物を包含する黒色土が良好に残存していることが判明した。このため計画・工程の見直しが必要となり、8月にトレンチ調査による再試掘を行った。

その後、調査期間中に工事計画の変更があり、泉沢5遺跡の調査が優先されることとなり、担当課の調査員および発掘作業員の過半数がそちらへ配置転換された（北埋調報330）。このため調査計画の大幅な改変が行われ、9・10月は調査の規模を縮小し、着手済みで西側部分のみを完掘した。平成26（2014）年度の札幌7遺跡の最終的な調査面積は1,295㎡となった。

平成27年度

5～7月にA地区北東側の1,000㎡を調査した。縄文時代後期後葉と考えられる盛土遺構3か所をはじめとする遺構・遺物が検出された。調査範囲は大部分が急傾斜の地形であることから、通常の人による発掘作業は困難で、滑落等により重大な労働災害が発生する恐れがあった。このため一部を除き、盛土遺構と包含層を調査区・層位ごとに重機で掘削し、平場に堆積させてから人力で遺物を回収する調査方法を取った。中央盛土の土層断面ベルト部分については、土嚢袋に土壌サンプルを採取した。担当課は併行して泉沢6遺跡の調査も行った（北埋調報350）。

平成28年度

当初計画で、A地区南東側の1,152㎡、B地区南西端の350㎡を対象として調査が行われた。どちらの調査範囲も沢地形があり、鋼矢板や水中ポンプ等の排水対策を取りながらの調査となった。

A地区調査範囲の大部分は、現況が平坦な牧草地で、その下部は平成26（2014）年度の再試掘で確認したズリ（岩石碎片）が1.5～2.0 mの厚さで充填されていた。これを重機で除去すると、3筋の沢が流下する旧地形が現れた。西側の沢は平成26（2014）年度調査範囲で沢頭が検出されており、内部より縄文時代後期前葉の遺物が多く出土した。中央と東側の沢では、それぞれ両岸に縄文時代晩期前半を主体とする遺物が大量に集積した土器集中が検出された（土器集中1～4）。本書は主にこの土器集中4か所について報告する。東側の沢は表土除去前から沢筋に砂利層が露出しており、流水により遺物包含層が流出したと判断され、当初は調査範囲から除外されていた。しかし、右岸で土器

集中3が検出されたことにより、対岸の札苺6遺跡側にも同様の遺構が存在している可能性が高まった。急遽、センターと道教委、函館開建の間で協議が行われ、東側の沢の左岸南側(251m)を調査範囲に追加することになった。左岸北側の沢頭にあたる部分は、ほぼ垂直の崖に近い地形で、地山が露出して遺物包含層がなかったため、調査範囲より除外された。すでに札苺6遺跡の調査終了範囲は高規格道路工事の土盛りがされており、この基礎に接する部分を通常の発掘調査により掘り下げると、土砂崩れ等による事故が発生する恐れがあった。そこで重機により調査区ごとに包含層を掘削し、安全な場所へ移動してから人力で遺物を回収する調査方法を取らざるを得なかった。縄文時代晩期中葉を主体とする遺物が大量に出土したことから、中央の沢の兩岸、東側の沢の右岸と同様に遺物廃棄場が存在していたと推測し、調査終了後に「土器集中4」と命名した。平成28(2016)年度のA地区の最終的な調査面積は1,403㎡となった。この年度でA地区の調査は完了した。平成26～28(2014～2016)年度のA地区の調査面積の合計は3,698㎡である。

B地区は、北側の札苺林道と沢筋の高低差が6.0～8.0mあり、大型車両等の通行時は直下の発掘作業員の安全を確保しながら調査を実施した。平成25年度調査範囲に接する沢の左岸は急傾斜の段丘崖で、遺構は検出されなかった。堰堤等による攪乱部分の除外、札苺林道下部分の一部追加、求積誤差により、平成28(2016)年度のB地区の最終的な調査面積は406㎡となった。また、林道下の北端にあたる部分は、過年度の調査結果に基づき、攪乱を受けているとの判断から、次年度の調査範囲より除外された。調査終了後、木古内町教育委員会による工事立会が行われ、札苺林道の迂回路が函館開建により造られた。

平成28(2016)年度の札苺7遺跡の最終的な調査面積は、A地区とB地区を合わせて、1,809㎡となった。担当課は併行して泉沢6遺跡(北埋調報350)、幸連5遺跡(北埋調報375)の調査も行った。

平成29年度

B地区の平成25(2013)年度調査範囲を南北に分断する札苺林道下で、平成28(2016)年度調査範囲に接する部分893㎡を対象として、5～10月に調査を行った。調査範囲の大部分は林道工事による削平や、抜根による攪乱を受けており、南西側の一部を除き遺構確認調査となった。前回調査で確認されていた遺構の続きのほか、新たに縄文時代後期後葉の堅穴や土坑を検出した。この年度でB地区の調査は完了した。平成25・28・29(2013・2016・2017)年度のB地区の調査面積の合計は11,989㎡である。担当課は併行して札苺5遺跡(北埋調報353)、幸連遺跡(北埋調報369)の調査も行った。

平成29(2017)年度で札苺7遺跡の現地での発掘調査は完了した。平成25～29(2013～2017)年度の5か年の、A地区とB地区を合わせた調査面積の合計は15,687㎡である。

(2) 整理作業

一次整理

平成25～29(2013～2017)年度、現地で発掘作業と並行して遺物の一次整理作業を行った。内容は遺物の水洗、分類、カード付け、台帳作成、集計、注記、土壌水洗等で、調査員と作業員数名が整理班として従事した。遺物水洗、土壌水洗については、雨天や強風等により屋外での発掘作業が困難な日に全作業員で行った。札苺7遺跡の調査範囲は大部分が傾斜地で、降雨後は滑落等による怪我が想定されたため、ある程度地面が乾燥するのを待つ必要があった。また、沢の内部や氾濫原などの低地を調査中、台風や豪雨により調査区が冠水したときは、水中ポンプ等による排水に時間を要することもあった。これらの場合は危険を避けるため、晴天であっても半日程度、全作業員で一次整理作業を行った。調査員は遺物分類のほか、現場で作成した遺構図や地形図等の点検・修正や、現地で撮影

した写真フィルムの整理等を行った。

平成 25・26 (2013・2014) 年度は、各年度中に出土した遺物についての一次整理を現地で終了することができた。平成 27 (2015) 年度は、想定していなかった盛土遺構 3 か所が検出され、当初計画を超える遺物が出土した。また、盛土等の土壌サンプルも土糞袋で多数採取した。調査が短期間だったこともあり、これらの一次整理は大半が次年度に繰り越された。平成 28 (2016) 年度、調査面積が増加し、さらに土器集中 4 か所から積算点数の 3 倍以上の遺物が出土した。先行していた前年度分の一次整理は終了することができたが、当該年度の出土遺物の大部分は再び繰り越された。平成 29 (2017) 年度、5 月より現地で前年度の土器集中 1～4 出土の遺物の水洗を進めていた。一方、担当課が併行して調査していた幸連遺跡で当初計画以上の遺構・遺物が検出され、発掘人工を増やす必要に迫られた。そこで 6 月までで令和 4 (2022) 年 1 月 7 遺跡の一次整理を中止し、その分の作業員人工を幸連遺跡の発掘調査に充当させることになった。7 月以降は、一次整理未了の遺物をすべて江別市のセンター本部へ搬送し、内業の二次整理人工を振り替えて一次整理作業を継続した。センター本部での一次整理は、翌平成 30 (2018) 年 8 月に終了した。

二次整理

平成 25 (2013) 年度の 11 月より、センター本部での二次整理作業を継続して行った。調査が先行した B 地区から始まり、その後 A 地区の平成 26 (2014) 年度調査範囲、盛土遺構の順に整理が進められた。一次整理が大幅に遅れた土器集中は、平成 30 (2018) 年度以降、本格的に二次整理が開始された。

遺構の図面類は、担当調査員が原図を基に素図を作成した。その他、調査範囲図や遺構位置図、地形図等は必要に応じて適宜作成した。これらの報告書に掲載する挿図はデジタルトレースを行った。土器は接合・復元作業を行い、掲載する復元土器の実測図、破片土器の拓影図・断面実測図の作成を行った。石器は破片接合、実測図の作成、計測等を行った。なお、B 地区の包含層出土石器の実測については、一部を除き外部へ委託した。掲載遺物については原則的にすべて写真撮影を行っている。また、現場で撮影した遺構等の写真を編集し、掲載遺物とともに写真図版を作成した。外部委託の分析としては、各年度に放射性炭素年代測定、樹種同定、黒曜石原材産地同定を行っている。

当初計画では、報告書はすべての年度の調査結果を合わせて、1 冊で刊行することになっていた。ところが平成 28 (2016) 年度、土器集中 1～4 が検出されると、遺物の出土量などから報告が大部になることが予想された。さらに土器集中関連の一次整理および二次整理が発後となり、刊行時期をそれ以外の報告内容と一致させるのが難しくなった。そこで、これらを分離して 2 冊とすることとした。土器集中 1～4 と焼土 F-34 以外の遺構・遺物については、令和 3 (2021) 年度に『木古内町札 7 遺跡 (1)』(北埋調報 368) で報告した。

令和 4 (2022) 年度は、土器集中 1～4 出土遺物の二次整理を継続するとともに、原稿執筆や遺物撮影、編集作業等も併行して行った。最終的に令和 5 (2023) 年 3 月に本報告書を刊行した。

5 調査結果の概要

平成 25～29 (2013～2017) 年度の調査の結果、遺構は堅穴住居跡 28 軒、土坑 196 基、柱穴状土坑 13 基、焼土 34 か所、剥片集中 6 か所、礫集中 1 か所、遺物集中 1 か所、埋設土器 1 か所、盛土遺構 3 か所、土器集中 4 か所を検出した。遺物の総点数は、遺構・包含層出土のものを合わせて 646,457 点である。ただし、土壌水洗選別等によって得られた、径 2.5mm 以下の微小な土器細片・石器細片については集計していない。遺構・遺物は縄文時代早～晩期、統縄文時代のものが各期あるが、

主体となるのは縄文時代後・晩期である。同後期は後葉の竪穴住居跡と盛土遺構を中心に多数の遺物が出土しており、前葉がこれに次ぎ、中葉は少ない。同晩期は前～中葉に形成された土器集中を主とし、後葉は少ない。同中期は竪穴住居跡や土坑が検出され、遺物は前半よりも後半の方が多い。同早・前期および縄文時代は遺構が検出されず、遺物も希少である。遺構・遺物の内訳を表I-1～3に示す。以下、各地区の概要を簡潔に記す。土器集中1～4およびF-34以外の遺構・遺物の詳細については、『木古内町札苅7遺跡(1)』(北埋調報368)を参照されたい。

A地区

調査範囲の地形は、大部分が後背地の丘陵から南東方向へ下る斜面で、西側は平坦面～緩斜面、中央から東側が急斜面から突き出した段丘面となっている。南東側は丘陵より流下する3筋の沢により開析された氾濫原～低地である。遺構は住居跡17軒、土坑154基、柱穴状小土坑13基、焼土24か所、剥片集中2か所、礫集中1か所、遺物集中1か所、埋設土器1か所、盛土遺構3か所、土器集中4か所を検出した。遺構の大半は、北～西側の平坦面～緩斜面に立地する。竪穴住居跡の時期は、縄文時代中期前半が1軒、同中期後半が5軒、同後期後葉が11軒である。土坑はフラスコ状や「半フラスコ状」のものが多く見られ、出土遺物や重複する遺構との新旧関係から、主に縄文時代中期前半～後期前葉と推測されている。北東側で検出された同後期後葉の盛土遺構3か所は主体部が調査範囲外で、詳細は不明である。本書では、主に南東側の沢の両岸で検出された同晩期前～中葉の土器集中4か所について報告する。

B地区

調査範囲の地形は、大部分が後背地の丘陵から南～西方向へ下る斜面で、西端は無名沢の氾濫原となっている。調査範囲は札苅林道により北西と南東に分断されていた。遺構は住居跡11軒、土坑42基、焼土10か所、剥片集中4か所を検出した。これらの遺構の分布は、西側の斜面～氾濫原、中央の標高28.0～31.0mの緩斜面、北東側の標高29.0～32.0mの緩斜面にまとまっている。林道とその北側の斜面で、縄文時代後期後葉の竪穴住居跡8軒を検出した。林道より南側では、同中期後半と同後期前葉の住居跡が各1軒、同後期初頭の天祐寺式期の焼土を検出した。北東側で確認された12基のフラスコ状土坑は遺物などを伴っていないが、A地区での同様の遺構の調査成果から、同中期前半以降～同後期後葉以前と推測されている。(芝田直人)

表I-1 年度別遺構数・遺物点数一覧

年度	調査面積(m ²)	遺 構 名										遺物点数(点)				
		竪穴住居跡	土坑	柱穴状小ピット	焼土	盛土遺構	土器集中	埋設土器	フレイク集中	礫集中		土器	石器等	土・石製品	小計	合計
平成25年度	10,690	12	44	0	9	0	0	0	4	0	遺構	5,803	27,145	52	33,000	60,587
											包含層	12,317	15,267	3	27,587	
平成26年度	1,295	13	112	13	8	0	0	1	1	1	遺構	5,952	11,117	14	17,083	50,083
											包含層	21,261	11,731	8	33,000	
平成27年度	1,000	2	37	0	11	3	0	0	1	0	遺構	2,176	1,012	1	3,192	122,561
											包含層	40,110	39,109	150	119,369	
平成28年度	1,809	0	1	0	6	0	4	0	0	0	遺構	225,500	10,162	13	235,675	411,253
											包含層	147,050	28,472	56	175,578	
平成29年度	893	1	2	0	0	0	0	0	0	0	遺構	473	1,076		1,551	1,973
											包含層	314	108		422	
合計	15,687	28	196	13	34	3	4	1	6	1	合計	500,959	145,201	297	646,457	

表 1-2 出土土器点数一覧

年度		分 類										小計	合計	
		I a	I b	Ⅱ a	Ⅱ b	Ⅲ a	Ⅲ b	Ⅳ a	Ⅳ b	V 群	Ⅵ a			不明
平成	遺 構	72	16	84	3	2,143	3	3,298	137			47	5,803	18,120
25年度	包含層	1	256	25	327	64	9,003	47	2,021	572	1		12,317	
平成	遺 構	10	1,104	641	899	5	3,126	167					5,952	27,213
26年度	包含層	1	27	1,978	3,547	6,217	284	7,393	1,814				21,261	
平成	遺 構		5	333	559	34	1,219		2			26	2,179	82,289
27年度	包含層	1	2	136	10,603	23,921	3,473	1,142	36,205	4,587		40	80,110	
平成	遺 構	1	39	505	934	2,461	1,050	12,639	206,718	1,150	3		225,500	372,550
28年度	包含層		59	1,858	4,089	22,477	2,293	8,135	108,059	100			147,050	
平成	遺 構			1			106		366				473	787
29年度	包含層						313		1				314	
	遺 構	0	73	70	2,027	2,137	5,643	1,059	20,648	207,024	1,150	0	76	239,907
小計	包含層	2	259	247	14,766	31,601	41,483	3,766	53,755	115,032	100	1	40	261,052
	遺 構	2	332	317	16,793	33,738	47,126	4,825	74,403	322,056	1,250	1	11	500,959
	合計													

表 1-3 出土土器等点数一覧

年度	分 類															小 計	合 計
	石 器	石 器 土 器	石 器 土 器	石 器 土 器	石 器 土 器	石 器 土 器	石 器 土 器	石 器 土 器	石 器 土 器	石 器 土 器	石 器 土 器	石 器 土 器	石 器 土 器	石 器 土 器	石 器 土 器		
平成 遺構	22	1	11	9	1	40										27,097	42,487
25年度 包含層	50	5	6	20	38	135	2									15,070	
平成 遺構	3	12	19	14	14	14	14									1,531	22,870
26年度 包含層	160	3	165	11	1	319	68	7	244	859	462					1,133	
平成 遺構	2	1	1	1	1	4										9	1,003
27年度 包含層	103	10	91	50	19	462	75	2	800	484	32,002	740	64	46	1	297	2,964
平成 遺構	28	1	97	13	5	358	195	5,221	447	66	6	119	3,124	10	3	39,359	40,272
28年度 包含層	136	17	199	24	6	438	61	2	1,102	782	20,865	1,762	101	26	3	2	243
平成 遺構	4	2	13	16	12	919	15	2			97	2	42	8	2	2,011	40
29年度 包含層																83	
平成 遺構																38	1,196
小計	439	47	441	1,222	64	1,340	156	12	2,804	1,338	20,881	3,113	166	129	2	311	17,017
合計	315	52	312	101	74	1,071	176	15	3,336	1,592	11,140	3,718	234	140	2	8	10,255
																5	166
																5	146,482

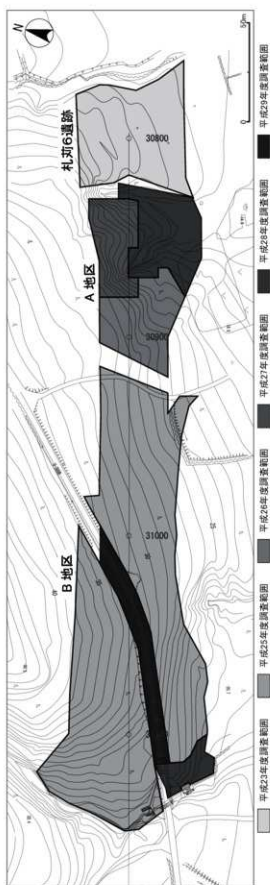


図 I-3 調査範囲と周辺の地形

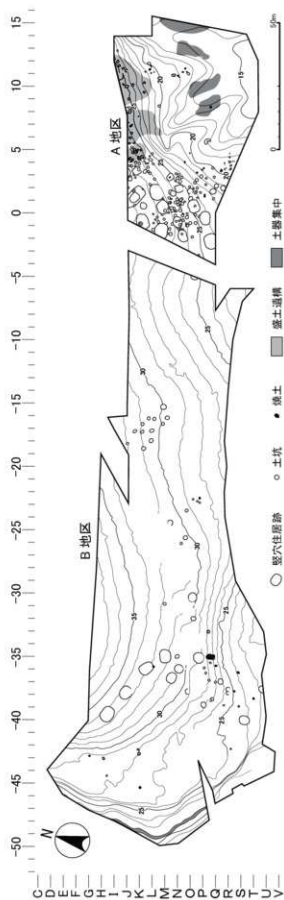
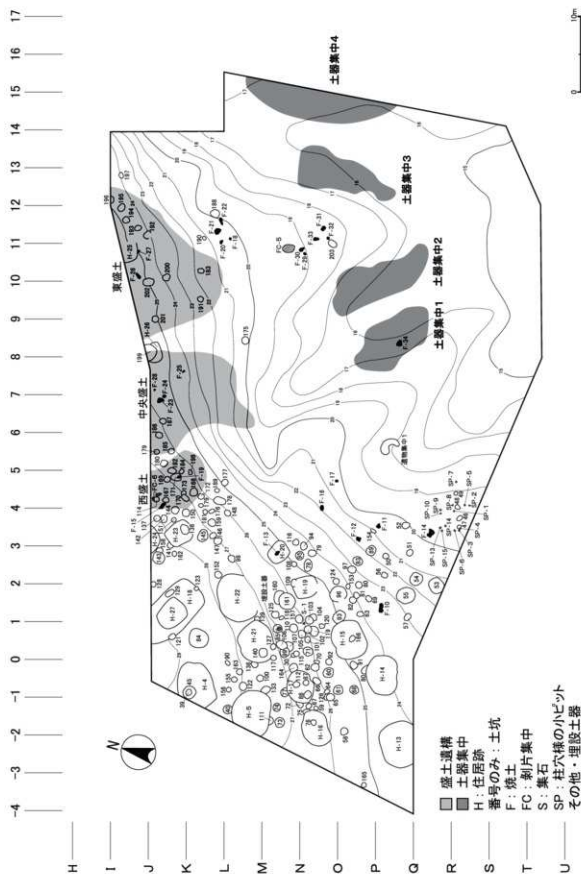


図 I-4 遺構の位置 (全体)



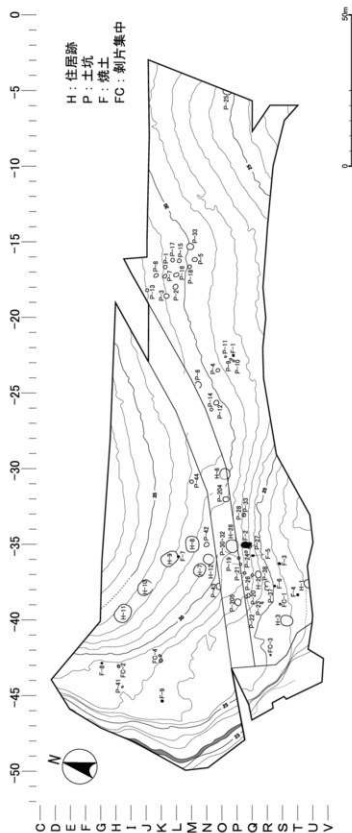


図 I-6 B 地区 遺構の位置

II 調査の方法

1 発掘区の設定

(1) 遺跡の発掘区

札苅7遺跡の調査範囲には、道路建設用地の中心線上にある工事測点STA30800～31100間の直線を利用し、発掘区（グリッド）を設定した。この直線をMラインと呼称して東西方向の基線とした。Mラインと平行する線を5.0 m間隔で引き、アルファベット大文字のライン名を付けた。これら東西方向のライン名は北から南へ向かって順に並べた。また、Mラインと直交する線のうちSTA30900を通る線をOラインと呼称して南北方向の基線とした。Oラインと平行する線を5.0 m間隔で引き、アラビア数字のライン名を付けた。南北方向のライン名は西から東へ向かって数字が大きくなるようにした。このため、Oラインより西側は数字にマイナス（-）が付く。これら南北方向のラインは、真北より10° 51' 52"西へ傾いている。東西方向にのびるアルファベットラインと、南北方向にのびるアラビア数字ラインを直交させることで、調査範囲全体に5.0 m×5.0 mの方眼を設定した。発掘区は、各方眼の北西隅で直交する2本のライン名を組み合わせることで表す。例えば、M15グリッドとは、Mラインと15ラインの交点より南東側の区画のことである。各交点には方眼杭を打設し、グリッドの名称を記入して、測量や遺物収集のための基準杭とした。この設定によるグリッドは、東側で調査された札苅5遺跡・札苅6遺跡・札苅8遺跡と共通のものを使用している（図II-1）。

発掘区の設定に使用した工事測点STA30800・30900・31000・31100の座標値は以下の通り（世界測地系）。座標系は平面直角座標系第Ⅺ系である。

STA30800 (M20) : X = -255,100.748	Y = 18,203.539	*調査範囲外（札苅6遺跡内）
STA30900 (M0) : X = -255,119.596	Y = 18,105.331	
STA31000 (M-20) : X = -255,138.445	Y = 18,007.124	
STA31100 (M-40) : X = -255,157.294	Y = 17,908.916	

地形図・構図等を実測するための水準測量は、両館開発建設部が設置した2級基準点「H19-2002」の標高H=17.095を電子レベル・オートレベルで往復観測し、仮設基準点に取り付けた。方眼杭の打設等は測量業者に委託した。

(2) 土器集中の発掘区

平成28(2016)年度に調査した土器集中1～3は遺物の密集度が高く、個別に出土地点を計測してから取り上げる、いわゆる点取り作業を行うと期間内に調査を終えることが難しいと予想された。一方、通常の5.0 m×5.0 mグリッド単位の遺物取り上げでは、その後の二次整理作業での土器接合等が滞る恐れがあった。そこで、おおよその出土位置を記録するため、遺物の取り上げを小グリッド単位で行った。すなわち、通常の5.0 m×5.0 mグリッドを1.0 m四方に5×5=25分割し、グリッド名の末尾にアラビア数字1～25を付けて表した。グリッド北西隅（グリッド杭のすぐ南東側）の分割区を1とし、東側へ2、3、4、5と続き、さらに下の段も西側から6、7、8、9、10と並ぶ。最後はグリッド南東隅が25で終わる。例えば土器集中1のP8グリッドは、北西隅のP8-1から始まり、P8-2、P8-3・・・と続き、最後は南東隅のP8-25となる（図II-2）。小グリッドラインの交点にはピンボールや塗り箸などを目印として立てたが、遺物と重複するため、丸ラベルシールなどで代用した地点もある。土器集中4は、小グリッドではなく、通常の5.0 m×5.0 mグリッド単位で遺物回収を行っている（I章第4節参照）。

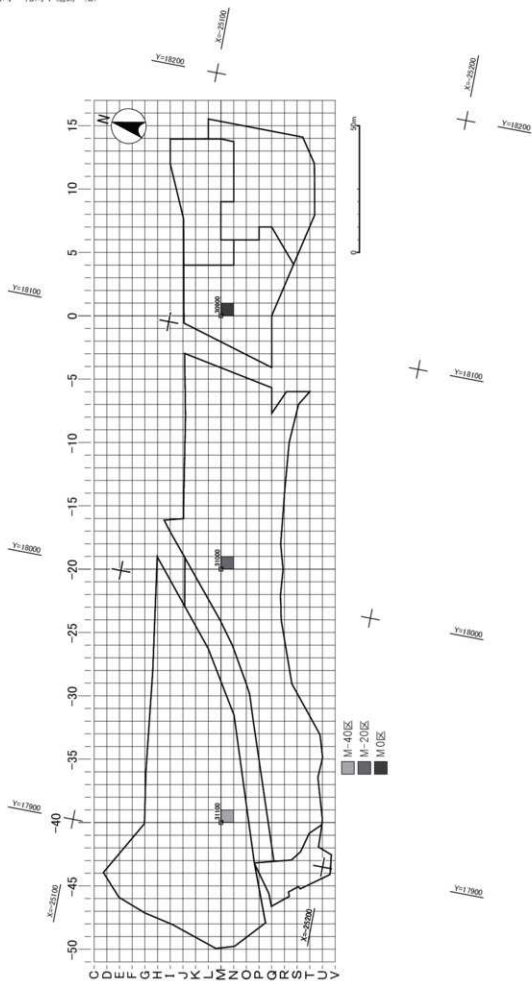


図 II - 1 発掘区設定図 (全体)

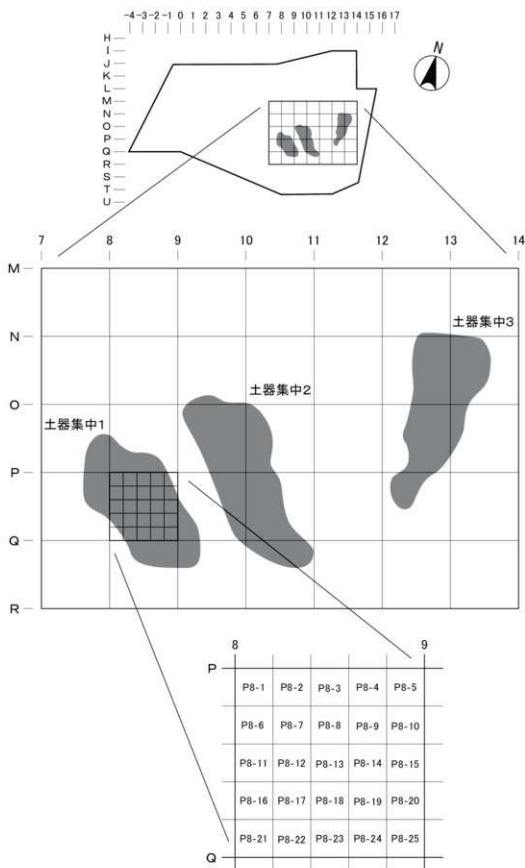


図 II-2 土器集中の発掘区設定図

2 掘削など

(1) 人力による調査

包含層調査は主に移植ゴテ・ねじり鎌で行い、状況に応じて竹筥や竹串を使用した。精査・清掃の際には前記のほかに炉ボウキ・ブラシ等を用いた。また、遺構・遺物の見られない範囲、攪乱坑等ではスコップ等を併用した。人力掘削は、状況に応じて深度30cmと深度50cmを適宜用いた。出土遺物は種別(土器・剥片石器類・礫石器類など)ごとに遺跡名、発掘区、層位、日付を記録して取り上げた。

竪穴住居跡や土坑は検出後に土層確認のためのベルトを設定し、トレンチ調査を併用しながら主に移植ゴテで内部を掘り下げた。遺物は床面・坑底面以外にも必要に応じて出土地点と標高を縮尺1/20または1/10で記録、出土状況の写真撮影後に個別に番号付けをして取り上げた。覆土中の遺物など、出土地点の記録が必要ないと判断したものは、遺構名と層位、日付を記録して一括で取り上げた。焼土は被熱範囲を測量した後、中心部で半載し、断面観察・記録を行った。また、焼土サンプルを採取し、乾燥後に土壌水洗選別(フローテーション法)により微細遺物や骨片・炭化物の検出に努めた。

土器集中は遺物が重層的に密集していたため、主に竹筥や竹串を用いて丁寧に包含層を除去し、出土状況を現わすことに努めた。前述の1.0×1.0mの小グリッドごとに写真撮影を行い、標高を記録してから、層位ごとに遺物を取り上げた。出土土器のうち個体としてのまとまりが把握できるものは、土器個体番号(Pot)を付けて取り上げた。

(2) 調査における重機の併用

調査開始前、遺跡の表土・客土を重機により除去した。また、調査中に生じた発掘排土も調査範囲外の仮置き場へと重機により運搬した。調査終了後は、これらの排土を用いて埋め戻した。

調査の効率化と安全を図るため、重機を併用することがあった。平成25(2013)年度、B地区の林道より北側の一部1,890㎡(旧D地区)については、木古内町教育委員会の試掘調査の結果から、遺構確認調査範囲として重機により上部のⅠ～Ⅳ層を掘削し、Ⅴ層上面から人力で精査した。平成27(2015)年度、A地区北東側の調査範囲は大部分が急傾斜地で、人力による手掘り調査は滑落等の危険があったため、重機で盛土遺構と包含層を調査区・層位ごとに掘削し、平場に移動してから遺物を回収する方法を取った。平成28(2016)年度、A地区東側の沢の左岸が調査範囲に追加されたが、札苅6遺跡終了範囲の道路工事土盛りが崩落する恐れがあったため、前年度と同様に重機で包含層を掘削してから平場へ移し、遺物を回収した。

(3) 濁水対策

調査範囲の大部分は丘陵から続く傾斜地で、大雨などにより土砂を含んだ水が、南側の植林された杉林や牧草地、畑地、錦鯉の養殖池に流入する恐れがあった。また、海岸線までは約700mと比較的近く、泥水の量によっては深刻な漁業被害も懸念された。このため、平成25(2013)年度にB地区、平成26・28(2014・2016)年度にA地区の調査終了範囲に濁水を集めるための側溝と沈砂池を設置した。

A地区は3筋の沢で開析されており、常に沢水が南東側の低地へ流れ出していた。よって平成28(2016)年度は調査を円滑に進めるため、排水対策をとる必要があった。この設計は(株)エル技術コンサルタントに依頼し、施工は(株)大森組が行った。まず、表土除去前にA地区の南東隅に沿ってL字状に土留めのための鋼矢板を打設して、掘削による崩落を防止した。鋼矢板に沿って素掘り側溝と釜場を設置し、ここから水中ポンプで水を汲み上げ、ノッチタンクで土砂堆積を行ってから、仮設排水管で既設路体排水施設(札苅6遺跡側)まで排水放流した。また、沢水が南側の養殖池の水源となっていることから、東側の沢の流末にバイオログ池を設置し、濁水処理後に排水した。

3 測量と記録

(1) 測量・図化

平面測量は方格（グリッド）杭を基準としての手測りによる。水準測量は自動レベルと 10mm 目盛のアルミスタッフを用いて、標高が付与された基準杭と対象の比高を直接観測した。遺構実測図は 10mm 方眼の A3 版セクションフィルムに基本的に縮尺 1/20 で記入した。遺構に伴う遺物等は出土状況に応じて縮尺 1/10 で実測している。地形測量図など範囲の広いものは縮尺 1/100 で記入した。

土器集中 1～3 の遺物出土状況図は層位ごとに写真実測により作成した。1.0 m の小グリッドラインの交点に、ピンクの布テープを合わせた水色の傘釘を打ち、測量基準とした。遺物と重なる場合は傘釘を打てないので、赤色の丸ラベルシールで代用した。また、それぞれの小グリッド名を記したプレートに遺物のない位置を選んで設置した。撮影は小型デジタルカメラを搭載したドローンにより、検出面に対してほぼ垂直方向の上空から行った。高度を変えて、低位から小グリッド単位、中位から小グリッド隣接部分、高位から全景および複数の小グリッドなどを撮影している。いずれも撮影部分が変わるように、測量基準となる傘釘または丸ラベルシール、小グリッド名プレートを画角に入れている。遺物の出土した高さ（標高）は、集積状況や個体の重なりが反映されると判断したものを主に測量し、出土状況を撮影した写真に直接記入した。

(2) 現場での撮影

a 撮影方法

平成 25 (2013) 年度、発掘現場での撮影は、中判フィルムカメラ（6×7 版カメラ）を主体とし、コンパクトデジタルカメラを補足的に使用した。平成 26 (2014) 年度以降は、デジタル一眼カメラを併用している。特に重要と判断したものについては、必要に応じて大判フィルムカメラ（4×5 版カメラ）での撮影も行った。平成 28 (2016) 年度は、前述のように土器集中 1～3 の調査においてドローンに搭載した小型デジタルカメラを使用している。記録保存のため同一カットを同じ条件（シャッタースピード・露出）で複数コマ撮影し 1 セットとした。なお、絞りを換えてさらに撮影した場合がある。遺構のほか、進行状況の確認となる定点撮影も行った。撮影に際し、各被写体の撮影方向・出土位置・取上面など必要な情報を入れることを考慮した。ブレ・ボケなどを防止するため、全ての撮影は三脚・レリーズを用いて行った。また、色補正の必要からカラーチェッカー・パスポートを入れて撮影した。

b 撮影機材・撮影データ

6×7 サイズカメラは Mamiya RZ67PRO II（フィルム：フジプロビア 100F）、デジタル一眼カメラは Nikon D5500・5600 を使用して撮影した。現場での撮影データ（カット No・撮影日・被写体名・被写体詳細または出土層位・撮影方向・フィルム種類・撮影者）は撮影者が野帳に記入し、記録とデジタルスチルカメラによる撮影との照合を行って、それを写真台帳とした。これらの項目はエクセル上でも台帳化し、データベースソフト・ファイルメーカー Pro に登録、画像と共に記録媒体と所在が検索しやすいものを作成した。リバーサルフィルムはスキャナーで取り込み、デジタル一眼カメラの RAW 形式の画像は現像し、いずれも TIFF 形式（360dpi:16bit）にしてから報告書の写真図版に用いた。現場でカラーチャートを入れて撮影したデジタル画像は DNG プロファイルを作成し露光調整や画像補正を行った。

写真の現像・編集等に使用した機材は、OS：Windows10Pro、CPU：インテル core i7、メモリ：32GB、GPU：NAVIA 製 GeForce、画面サイズ 24.1 インチ・解像度 1920×1200・キャリブレーション内蔵のカラーマネージメントモニター、ソフトはカラーナビゲーター、アドビ CC ブリッジ 2020、インデザイン 2020、フォトショップ 2020 である。

4 資料整理

(1) 図面等

原図に訂正や変更があった場合は、その箇所が確認できるように図面もしくは野帳に書き込んでいく。その後、原図から1mm方眼の方眼紙に鉛筆(芯径0.5mm)を用いて作成した素図をスキャナーで取り込み、パソコン上で描画ソフト(Adobe Illustrator CC)により補正・加工し版下を作成した。

(2) 出土品

一次整理: 掘り出された土器・石器等は、野外作業と平行して現地で水洗・乾燥を行った。水洗はボンドブラシや歯ブラシなどを使用して遺物に付着した土を洗い落とした。乾燥は新聞紙等を敷いたプラスチックコンテナに遺物を入れて、室内で行った。室内では暖房・除湿機などを用いて乾燥を促した。水洗・乾燥の終了した遺物は、埋蔵文化財センターに搬入し、分類、材質の確認、遺物台帳の作成、遺物カードの添付、注記作業などを行った。

遺物台帳は、収集の単位ごとに遺物名と点数を決定したうえで遺物番号を与え、B5判の様式を印刷して手作業で記入した。全遺物を登録した台帳を土器と石器等とに分けて作成した。台帳には出土グリッドまたは遺構のほか、遺物番号・取り上げ日・層位・遺物名・分類・材質(石器等に限る)・点数その他を記入した。台帳登録の終わった遺物は、台帳と同一の内容を記入した遺物カードとともに遺物番号ごとにチェック付ポリ袋に納めた。

注記は、土器片・石器等ともに微細なものを除く大多数を対象とした。注記できなかった遺物は遺物番号ごとにポリ袋に納め、注記済みのものと同封した。注記内容は、「遺跡名略号・グリッド名または遺構番号・層位・遺物番号」である。札罫7遺跡の遺跡名略号は「サツ7」である。

二次整理: 一次整理の終了した土器・石器等について接合を行った。土器集中は遺構ごと、分類ごとに進め、また隣接する土器集中や周辺の包含層出土の遺物との接合も試みた。平行して遺物台帳の修正・コンピューターへの入力を進めた。整理終了後、原則として各遺物と遺物カードを同封したチェック付ポリ袋に戻し、分類・グリッド・遺物番号順に整頓し、プラスチックコンテナに収納した。

接合作業の結果、ある程度の破片がまとまり、もとの器形の復元が可能な個体については、接着・補強した。文様等が特徴的な破片土器については拓本を取り、スキャナーで取り込みデジタル化した。復元土器・破片土器の断面・石器等はすべて人手により原寸実測した。実測図の墨入れ、拓本と断面の統合等の作業については、描画ソフト(Adobe Illustrator CC)により行った。

(3) 写真

室内撮影の機材は、デジタルカメラ:ハッセルブラッドH3DII、レンズ:HC Macro 120mm、ストロボ:コメット CS-2400TII・CL 5Hである。撮影したRAW形式の画像はTIFF形式(350dpi16bit)にしアドビフォトショップCS 6で調整、写真図版を作成した。

5 保管

今回の報告に関する図面等・写真は2023年3月現在、道立北海道埋蔵文化財センターで保管している。図面等は全てスキャナーで取り込みデジタル化した。写真アルバムおよび写真データを収めたハードディスクは定温・定湿に保たれた特別収蔵庫に保管される。出土遺物に関しては、本報告書刊行後、本古内町へ移管予定である。調査年度・北埋調報番号・遺跡名・遺物名・分類・収納番号を記したラベルを貼ったコンテナに収納し、今後の活用に備えた。

6 遺物の分類

(1) 土器等：(公財)北海道埋蔵文化財センターがこれまで用いてきた一般的な土器分類に準じ、下記のⅠ～Ⅶ群に分類する。必要に応じてa・b・c類に細分した。土器型式名は地域性を考慮して、従来当該地域で用いられてきたものを用いた。土製品については特に細分項目を設けない。

Ⅰ群：縄文時代早期の属性のある土器群

- a類：貝殻線文・条痕文・沈線文のある土器。物見台式・鴨川式・住吉町下層式・根崎式など。
- b類：撚糸文・絡条体圧痕文・短縄文などが施される土器。東銅路系土器群など。

Ⅱ群：縄文時代前期の属性のある土器群

- a類：縄文尖底・丸底土器。松江式・桔梗野式・石川野式・春日町式など。
- b類：円筒土器下層式土器。ハマナス野Ⅰ式・般川式・サイベ沢Ⅰ～Ⅳ式など。

Ⅲ群：縄文時代中期の属性のある土器群

- a類：円筒土器上層式土器とこれに後続する土器。古武井式・サイベ沢Ⅴ～Ⅶ式・見晴町式など。
- b類：榎林式・大安在B式・ノダツⅡ式・煉瓦台式などに相当するもの。

Ⅳ群：縄文時代後期の属性のある土器群

- a類：天祐寺式・涌元式・トリサキ式・大津式・白坂3式などに相当するもの。
- b類：ウサクマイC式・手稲式・鯉調式などに相当するもの。
- c類：堂林式・三ツ谷式・湯の里3式などに相当するもの。

※Ⅳ群c類土器が縄文時代後期後葉の堅穴住居跡や盛土遺構、遺物包含層より多く出土している。本書では、『札苅7遺跡(1)』(北埋調報268)における袖岡による分類に準拠する。堂林式など北海道の在地系土器に加えて、東北地方の「瘤付土器Ⅰ段階」(十腰内4式古・新段階を含む)・「瘤付土器Ⅱ段階」(十腰内5式古・新段階を含む)・「瘤付土器Ⅲ段階」(十腰内6式の一部)に相当するものも包括される。

Ⅴ群：縄文時代晩期の属性のある土器群

- a類：大洞B式・大洞BC式とこれに並行する在地の土器。東山1a式・東山1b式・上ノ国式。
- b類：大洞C₁式・大洞C₂式とこれに並行する在地の土器。札苅Ⅰ群・札苅Ⅱ群・聖山Ⅰ式。
- c類：大洞A式・大洞A'式とこれに並行する在地の土器。聖山Ⅱ式・湯の里6式・大平式。

※本遺跡では搬入品と考えられる大洞式土器の出土点数がきわめて少ないことから、近年東北地方で汎用化されている晩期土器群の9細分：大洞B₁式→大洞B₂式→大洞BC式→大洞C₁式→大洞C₂式古段階→大洞C₂式新段階→大洞A₁式→大洞A₂式→大洞A'式(山内1930、藤沼・関根2008)には該当させなかった。併行関係が明瞭ではない在地系土器については、これまで当該地域において型式設定された土器の編年の位置に倣って、大まかに晩期前葉のものをa類、同中葉のものをb類、同後葉のものをc類とした。

Ⅵ群：統縄文時代の属性のある土器群

- a類：恵山式に相当するもの。
- b類：後北式に相当するもの。
- c類：北大式に相当するもの。

Ⅶ群：擦文文化期の属性のある土器群

出土していない。

土製品：土偶・土玉・ミニチュア土器・焼成粘土塊など。

(2) 石器等：石製遺物のうち人間が製作・使用した痕跡のあるものは器種に分類し、便宜的に剥片石器群・磨製石器群・礫石器群に大別した。加工痕・使用痕ともみられないものは礫とした。石製品については特に細分項目を設けない。

剥片石器群：主に剥片剥離技術によって得られた剥片を押圧剥離などによって二次加工して製作されたもの、およびその製作に関わるもの。

石磯：素材剥片を扁平加工し、端部に尖頭部を作り出した、概ね5.0cm以下の小型石器。

石槍：素材剥片の両面を加工し、端部に尖頭部を作り出した、概ね5.0cm以上の石器。

両面調整石器：素材剥片の両面を加工したもので、定型的な石器に分類されない石器。

石錐：素材剥片の端部に錐状の刺突部を作り出した石器。

つまみ付きナイフ：素材剥片の側縁に刃部を有し、端部につまみ状の小突起を作り出した石器。

石筥：ほぼ左右対称で下方が広がった筥状の剥片を素材とし、下端に刃部が設けられている石器。

スクレイパー：素材剥片の側縁に連続的な調整を施して刃部を作り出した石器。サイド・スクレイパー、エンド・スクレイパー、ラウンド・スクレイパーなどがある。

ビース・エスキュー（楔形石器）：上下端に両極技法による剥離痕が見られる石器。

Rフレイク：二次加工が施されているが、定型的な石器に分類されない剥片。

Uフレイク：調整痕は見られないが、微細剥離痕から刃部として使用したと推測される剥片。

フレイク・チップ：剥片石器の製作の際に、石核や石器から剥離された不定形な剥片・細片。

石核：剥片石器の素材となる剥片を剥離した後に取り残した、芯の部分で成す石塊。

原石：剥片石器の素材とするため持ち込まれたと考えられる珪質頁岩・メノウなどの円礫。

磨製石器群：主に研磨技術によって成形、二次加工された石器、およびその製作に関わるもの。

磨製石斧：打ち欠き・敲打・研磨により、斧状の刃部を作り出した石器。

石のみ：磨製石斧と同様の形状であるが、刃部の幅が狭い、細身で小型の石器。

擦り切り残片：扁平な素材礫を分割するために、V字状の溝が切り込まれた痕跡が残る礫片。

礫石器群：素材となる礫の形状をほとんど変えていないが、敲打や打ち欠きによって荒く成形してから使用した石器、およびその製作に関わるもの。

たたき石：礫の端部に敲打による潰れが観察される石器。

凹石：礫の主面に敲打によるくぼみが観察される石器。

すり石：礫の稜や側面に磨った痕跡が観察される石器。

北海道式石冠：礫の側面に鉢巻状の溝を作出し、下面に平滑な磨った痕跡が観察される石器。

扁平打製石器：扁平礫の周縁部を打ち欠いて成形し、幅の狭い下縁に使用痕が観察される石器。

石鋸：扁平礫の長辺に断面がV字形となる直線的または鋸歯状の刃部が設けられた石器。

砥石：礫の表裏面や側面に、主に研磨のためと考えられる、磨られた痕跡が観察される石器。

石錘：礫の長軸または短軸の両端に打ち欠きなどによる袈が設けられた石器。

台石：大型礫の平坦面に敲打された痕跡が観察される石器。

石皿：大型礫の平坦面に磨られた痕跡が観察される石器。

加工痕のある礫：礫の一部に加工が施されているが、定型的な石器に分類されないもの。

石製品：「三脚石器」・石棒・石刀・石冠など。

(3) その他の遺物：明治時代以降の現代遺物や礫以外の自然遺物などがある。

現代遺物：陶磁器・金属製品・ガラス製品など。

自然遺物：骨片・炭化材・炭化種子・ベンガラなど。

(芝田)

Ⅲ 遺跡の環境

1 立地と由来

(1) 所在と行政区分

札苅7遺跡は、木古内市街地から北東へ約4.0km、道南いさりび鉄道(旧JR江差線)札苅駅の北約0.5kmに位置する。遺跡の所在する木古内町は、北海道の南西部、内湾する渡島半島南縁の最奥部にあり、津軽海峡に面している。北東は北斗市、北西は厚沢部町、西は上ノ国町、南西は知内町に接する。北海道南部の中心都市である函館市から西へ約40.0km離れている(図Ⅲ-1)。

木古内町の起源は、古くからこの地にあった木古内村、札苅村、泉沢村、釜谷村、瓜谷村である。江戸時代、幕府の直轄地とされた一時期を除き、松前藩の領内にあった。明治元(1868)年11月、松前藩は北上してきた旧幕府軍の攻撃を受け、蝦夷地から駆逐された。その後、ごく短期間ではあったが、この地域は箱館に拠った旧幕府軍の勢力下に置かれた。明治2(1869)年4月、箱館戦争が始まり、木古内地域は進撃する新政府軍と箱館へ敗走する旧幕府軍の間の激戦地となった。翌5月、五稜郭の旧幕府軍が降伏し、蝦夷地は明治新政府の支配下となった。同年7月、それまで新政府の出先機関であった箱館県(旧箱館府)は廃され、太政官の下に開拓使が設置された。同年8月、蝦夷地は「北海道」と改称され、大宝律令の国郡里制に倣って11「国」86「郡」に分けられた。北海道南西部のうち、現在の八雲町落部～熊石より南が「渡島国」(おしまのくに)とされた。国名は北海道の古い名称である「渡島」(わたりしま)に由来する。制定当初、「渡島国」は爾志・檜山・津軽・福島・上磯・茅部・亀田の7郡で構成されていた。青森の津軽が含まれているのは、館藩(旧松前藩)の所領であったためである。木古内町にあった5か村は「渡島国」の「上磯郡」に属することとなった。

明治4(1871)年7月、廃藩置県が断行され、上磯・茅部・亀田の3郡は北海道開拓使の所管とされた。館藩の旧領である爾志・檜山・津軽・福島の4郡には館県が置かれたが、同年9月弘前(青森)県に吸収合併された。明治5(1872)年9月、開拓使函館支庁が設置され、翌10月に青森県より移管された旧館県4郡を合わせて、渡島国7郡をその管轄下とした。同年11月、町村大区小区制が施行され、上磯郡は第五大区となり、このうち三ツ石・釜谷・泉沢・札苅・木古内・瓜谷の6か村が第三小区とされた。その後、明治9(1876)年9月に大小の区画が変更され、上磯郡は第十三大区となり、もとの6か村に当別・茂辺地を加えた8か村が第一小区とされた。

明治12(1879)年4月、木古内村が瓜谷村を合併した。同年7月、大区小区は廃止され、郡区編成法により、亀田・上磯・茅部の3郡は亀田村に置かれた郡役所の所管となった。明治13(1880)年1月、戸長役場が札苅村に設けられ、木古内・札苅・泉沢の3か村が「札苅外二村戸長」の管轄となった。明治15(1882)年2月、開拓使は廃止され、札幌・函館・根室の3県が置かれた。上磯郡は函館県の管轄となった。明治18(1885)年2月、それまで当別戸長役場に属していた釜谷村が編入され、現在の町域と同じ規模となった。明治19(1886)年3月、3県は廃止され、北海道庁が置かれた。上磯郡は再び函館支庁の管轄となった。その後、函館支庁は大正11(1922)年8月に渡島支庁、平成22(2010)年4月に渡島総合振興局へ改称した。明治21(1888)年7月、木古内・札苅・泉沢・釜谷の4か村は「木古内外三村戸長」の管轄となり、役場も木古内村へ移った。明治35(1902)年4月、二級町村制が施行され、4か村は合併して「木古内村」となり、戸長の職名は村長に改められた。このとき「札苅」は大字村として残り、昭和5(1930)年に字名へと変わり現在に至っている。昭和17(1942)年10月、町村制が施行され、現在の「木古内町」となった(木古内町史編纂委員会1982)。

(2) 現況

札苺地区の集落は、幸連川河口より西側の沿岸部に形成されてきた。海岸線に沿って東西に走る鉄道と国道228号線を挟み、その周辺に住宅が広がっている。集落内には駅、郵便局、商店、神社、寺院、墓地などがある。かつて集落の中心にあった札苺小学校は、平成15(2003)年に125年の歴史に幕を下ろした。河口の西側に造られた札苺漁港では、主に沿岸漁業やノリ・ワカメなどの養殖が行われている。集落の後背地にあたる山の大部分は、道南杉の植林地である。植林の歴史は古く、明治43(1910)年に加賀前田家が木古内で林業経営を始めたのが端緒とされる。山と集落の間の微高地は植林地のほか畑や牧草地として利用されている。隣接する札苺6遺跡では、昭和50年代に畑であった頃の畝跡が検出された(北埋調報301)。集落北辺の札苺地藏堂および地藏杉付近で町道幸連1号線から分岐し、西側の蛇内地区まで札苺林道が伸びている。また、集落から北西へ1.0~1.2km離れた山間部には、平成28(2016)年3月に開業した北海道新幹線の札苺トンネルがある。

札苺7遺跡は集落の北側、海岸線から約0.6km内陸に位置する。調査前の現況は、山林と林道、牧草地であった。このうち調査範囲の大半を占めていたのが、植林された杉が密集する山林である。このため、抜根路や現代の風倒木による攪乱部分が多く見られた。また、伐採の際の切り株や枝が沢などに大量に投棄されていた。林道は山の斜面を切り通して造成されており、B地区の当該部分では遺物包含層まで掘削が及んでいた。A地区の南東部から調査範囲外にかけては平坦な牧草地が広がっていた。ここは本来、山際の水源から流下した沢水が集まる低湿地であったと考えられるが、トンネル工事で生じたズリ(破碎岩片)により埋め立てられ、牧草地として改良されていた。地元住民や建設業者の話によれば、A地区とB地区の間で、農地進入路として使用されていた砂利道は、元々はこのズリを大型車両で搬入するために掘開された工事用道路であったらしい。

(3) 地名

木古内(きこない)や札苺(さつかり)という地名は、すでに17世紀の近世アイヌ文化期(江戸時代前期)には用いられていた。当時蝦夷地(北海道)を支配していた松前藩が、寛永12・13(1635・1636)年に藩士村上掃部左衛門を実地に巡検(「鳥めぐり」)させて作成した『松前蝦夷図』に記されていたと考えられる。『松前蝦夷図』は幕府へ呈上され、正保元(1644)年に全国地図である『正保御国絵図』の一部となった。『松前蝦夷図』の原本は失われているが、現存する『正保御国絵図』には松前周辺の和人に「キク内」の地名が確認できる。その後、元禄13(1700)年に松前藩が「元禄御国絵図」とともに幕府へ提出した『松前島郷帳』(「従松前東郷並蝦夷地之覚」)の中に、「きこない村」「しゃっかり村」「いづみさわ村」「かまや村」などの地名が記されている。

「キコナイ」はアイヌ語地名の「リコナイ」または「リロナイ」が転訛したものと考えられる。文政7(1824)年に上原熊次郎が著した『蝦夷地名考並里程記』には、「喜古内。リコナイなり。登る沢と訳す。リコとは高く登ると申事。此沢辺自然に高く上る故に地名になすといふ。此処より西に江指(江差)井上の国え山道あり。」とある。この山道とは当時津軽海峡沿岸から日本海側の唯一の横断道路であった木古内山道である。一方、明治24(1891)年刊行の永田方正『北海道蝦夷語地名解』には、「Rir'o nai リロナイ 潮入り川」と書かれている。後の『北海道駅名の起源』(高倉・知里・更科1954)でもこの説を採用し、満潮の時に川に潮が逆流することが由来だと説明している。いずれも木古内の地勢・地誌とアイヌ語を結び付けて解釈したものであるが、江戸時代の紀行文や地図に「リコナイ」や「リロナイ」の記載が見られないことから、どちらが正しいかは判断できない。

札苺(さつかり)という地名も、アイヌ語の「シラツトゥカリ」が由来とされる。上原熊次郎の前掲書には、「夷語シラツトゥカリなり。磯の端と訳す。此所海崖磯ありて、それより喜内子、知内迄の

内磯なきゆえ地名になすといふ。」とある。また、永田方正の前掲書もこの説を採り、「Shirattukari シラット・カリ 岩磯ノ此方」としている。すなわち、知内～木古内方面から前浜を進むと、札苅より東側は磯（海食崖海岸）が続くことから、この地名が付けられたと考えられている（山田1994）。一方、安政4（1857）年、松前地の村落を調査した市川十郎の『蝦夷地検査録』には、「方言シャツカリといへり。実はシラツツカリにして、シラツはシリリの語を約していう磯のことなり。ツカリは前の義なりと旧説にいへり。按ずるにサをシャと読ることは常なるも、シャをサと転ずることなし。且つシリリをシラツと約言するはあるべけれども、茲にいふサツカリはシラツカリとは異にして、サツは獲物をいひ、刈は狩なりといはむか。」とある。市川はアイヌ語を解せず、現地で聞き取った音から独自に地名を解釈している。

しかしながら、近世以前からこの地にアイヌ民族が生活していたことは明らかであり、何らかのアイヌ語地名が元になっていると考えた方が自然であろう。前述の「シラット・カリ」→「シャツカリ」→「サツカリ」は札苅周辺の海岸地形をよく反映しており、アイヌ語地名から和語地名への転訛としても妥当といえる。ところで北海道では、アイヌ語の「sat=乾いた、水の枯れた」に由来するとされる地名がよく見られる（札幌、札内、札沼、札前など）。「サツカリ」がアイヌ語の原音により近いならば、「sat・kar・i 水の枯れた・廻す・処」の可能性もある。あくまで推測であるが、干潮の際に磯が遠浅まで広がり、船が通常の航路よりも迂回しなければならないことを指すのではなかろうか。ただし、現存する地名に付く「sat」は沢や川の場合が大半で、海岸の例はないようである。

（4）札苅地区の中・近世史

近世以前に札苅地区の集落がいつごろから形成されたかについては、明確な文獻記録は残されていない。大正3（1914）年に編まれた木古内郷土資料では、「木古内村開創は年代不詳なるも、古老の口碑によれば、文永11甲戌（1274）年始めて内地より西村某・中山某なる者土着せりという。」とされるが、真偽は定かではない（木古内町史編纂委員会1982）。ただし、札苅遺跡で北宋銭6枚が副葬された中世墓が検出され、鎌倉時代初期～室町時代中期の、いわゆる本州から渡来した「和人」のものとの推測されていることから（木古内町教委1974）、この時期に札苅地区で「和人」による小規模な集落が存在した可能性がある。

15世紀に入ると、渡島半島南部では土豪化した本州系勢力（「渡党」の系譜を引くと推測される集団）が各地に館を築いて割拠する、いわゆる道南十二館時代となった。長祿元（1457）年、コシヤマインに率いられたアイヌ民族が蜂起した。アイヌの軍勢は志海苔館をはじめとする道南十二館を次々と攻略し、木古内にあった中野館（館主：佐藤三郎左衛門尉季則）もこのとき陥落している。この戦いは上之国の守護であった武田（蠣崎）信広により鎮圧されたが、その後も和人勢力とアイヌ勢力の戦いは断続的に続いた。天文19（1550）年、蠣崎季広が「夷狄の商舶往還の法度」を定め、アイヌ勢力との議和が成立した。この法度では「東より来る狄の商舶は必ず志利内（知内）の沖にて帆を下げ休んで一札を為して往還する事」と定められ、蠣崎氏からアイヌの有力者（「尹」）へ年棒・扶持（「夷役」）を納めることを条件に、天の川～知内以南が和人地として承認された。このことから、16世紀後半、札苅付近は和人地ではなかったと推測されている（木古内町教委1974）。

ところが、前述のように17世紀前半の江戸時代前期になると、『正保御国絵図』で確認されるように木古内周辺は和人地の一つとなっている。蠣崎氏の後裔である松前藩が本州の統一政権との結びつきを強めることで勢力を拡充し、幕藩体制が確立するころには函館～熊石付近まで蝦夷地との境界を押し戻していたと考えられる。松前藩の支配下となった後も札苅地区にアイヌ民族が居住していたことが、津軽藩の正史である『津軽一統志』に記述されている。寛文9（1669）年の「寛文蝦夷蜂起」

(シャクシャインの戦い)の際に、津軽藩は幕府の命により藩兵を派遣したが、その報告の中に「さすかり 川有 是迄三里 是より狄あり おとなニシケ 家四、五軒」とある。また、寛文10(1670)年の津軽藩士による報告にも「さすかり 家四五間斗 狄おとなにし介」とある。このことから、当時札苅には4、5軒のチセからなるアイヌコタンがあり、ニシケという長がいたことがうかがえる。札苅遺跡では、太刀・山刀・小刀・簀・魚鉤・針などが副葬されたアイヌ墓が1基検出されており、江戸時代初期と推定されている(本古内町教委1974)。

シャクシャインの戦いでは、北海道のアイヌ民族すべてが蜂起に呼応したわけではなく、参加を拒否した地域集団も存在した。特に松前地周辺のアイヌ民族は、むしろ松前藩側へ「御味方」するという立場をとっている(菊池2003)。札苅アイヌも同様であったと考えられ、宝暦8(1758)年の『津軽紀聞』に「しゅっかり村 同十三四軒 此所にゑそ人 有 九十余年以前まんそくといふゑそ蜂起の節、松前御領主へ反り忠御味方申に、今に至て年始御札に上る。此時津軽にも御加勢ありしとそ」とある。この記述と他の和入地のアイヌの例から、札苅アイヌが寛文蝦夷蜂起以後も御味方蝦夷として松前藩より特別な待遇を受け、「年始御札」の際にアイヌ民族固有の風俗を藩主の前で披露する通例となっていたと推測されている(本古内町教委1974)。18世紀後半以降、札苅アイヌについての記録は途絶え、その消息は不明となる。現在の札苅の集落にもコタンの痕跡は残されていない。

2 地形と地質

(1) 地形

本古内町域は、大部分が山岳・丘陵地帯である。地形は、東西約15kmの海岸に沿って発達する海成段丘(海岸段丘)、その内陸に形成される低平な丘陵、さらに奥の標高300~600mの山地に大別される。このほか本古内川・佐女川の下流域~河口域にやや広い沖積平野が見られる(図3-1)。

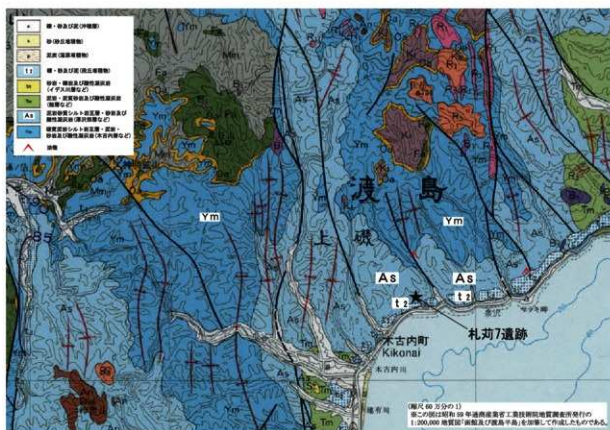
海成段丘は、段丘面の発達・連続性、高度分布、開析程度をもとに、高位のものからH₁面、H₂面、M₁面、M₂面、M₃面の5面に区分されている(宮内・八木1984)。幸速付近を境として北東部と南西部では段丘の発達の様子が異なる。北東部では5段の海成段丘がひな段状に模式的に発達するのに対し、南西部ではH₁面、M₁面しか見られないが、その幅は北東部に比べ広い。札苅付近は標高10~40mのM₁面のみが分布し、段丘面の幅は約1kmになる。また、幸速川には小規模な断層(f₄断層)があり、M₁面の旧汀線の比高差は17mほどに達する。札苅6遺跡で、縄文時代晩期~10世紀の間に発生した、この断層に関連すると考えられる地震による地割れが検出されている(北理調報301)。

北側の山地より本古内川・瓜谷川・佐女川・大平川・蛇内川・幸速川・橋興川・亀川・大釜谷川などの河川が南東もしくは東方向へ流れ出している。これらは本古内川を除き流路延長10km未満の小河川で、流域の丘陵や海成段丘を開析して比較的深い谷地形を作り出す。札苅付近では東側の幸速川の小支流のほか、大淵川など2、3筋のごく小さな川が集落内を流れている。

札苅7遺跡は海成段丘M₁面の最奥部で、後背の丘陵との地形の転換点に相当する。A地区の北~西側は標高20~30mの南東へ降りる斜面で、下位ほど急傾斜となる。北東側は特に急な崖錐地形となっている。この斜面は3筋の小沢により開析され、それぞれの沢頭には湧水点がある。いずれの小沢も水量が多く、常時沢水が流れ出している。南東へ流下する西側および中央の深い2筋の小沢は、南へ流下する東側(札苅6遺跡側)の別筋の沢と合流し、南側で標高14~16mの平坦な低湿部を形成する。これらの小沢に挟まれて、古い段丘面が舌状に突き出ている。B地区の北側は丘陵から続く標高30~37mの斜面である。南西側は標高26~29mと比較的平坦で、西端の深い沢の氾濫原であったと推測される。東側は標高22~32mで内湾する南東向きの緩斜面となっている。



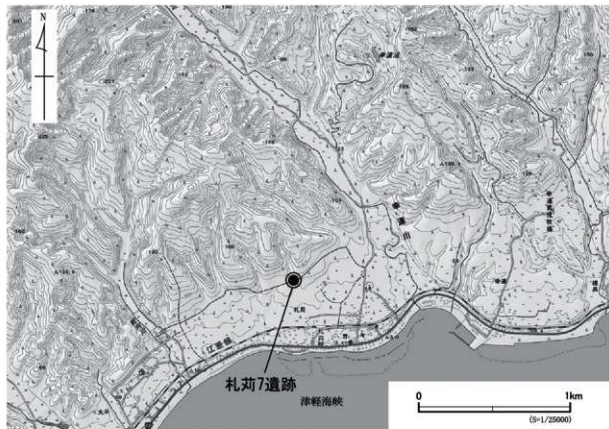
図Ⅲ-1 遺跡の位置と木古内町の地形



図Ⅲ-2 木古内町周辺の地質

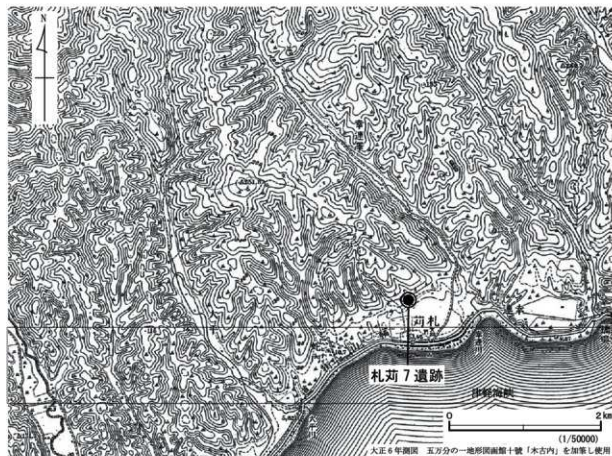
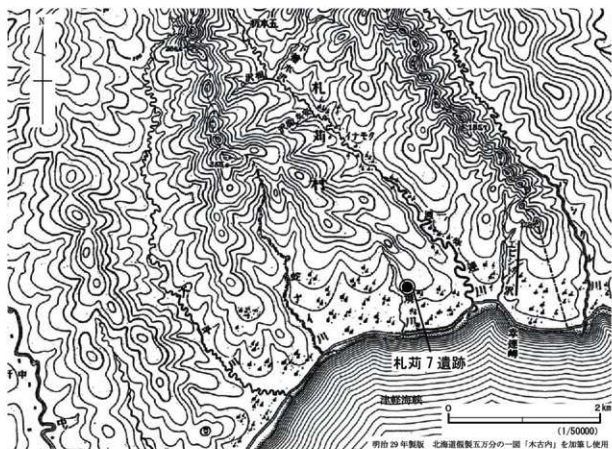


国土地理院発行の数値地図50000分の1(地図画像)『北海道-IV』『木古内』『函館』(平成21年)を使用



国土地理院発行の電子地形図25000分の1(地図画像)『渡島・桧山』『木古内』(平成27年)を使用

図Ⅲ-3 遺跡周辺の地形



図Ⅲ-4 周辺の地形（明治期・大正期）

(2) 地質

札苅7遺跡は、礫・砂および泥からなる第四紀系の段丘堆積物層の上部にある。すぐ北側の山岳・丘陵は、泥岩と砂質シルト岩の互層、砂岩および酸性凝灰岩から構成される新第三紀系の厚沢部層を基盤とする。また、北西側の幸連川上流部には硬質泥岩とシルト岩の互層、泥岩・砂岩および酸性凝灰岩から構成される戸田川層(木古内層)がある(図Ⅲ-2)。

札苅7遺跡では、白頭山-苦小牧火山灰(B-Tm:10世紀降下)、駒ヶ岳d火山灰(Ko-d:1640年降下)の2種類のテフラが確認された。これらは縄文時代晩期以降の土層と考えられるⅡ層中に散漫に堆積している。これよりも古い同後期後葉以前の遺物包含層であるⅢ・Ⅳ層中にはテフラは見られなかった。昭和46~48(1971~1973)年の札苅遺跡の調査では、遺物包含層より上位に駒ヶ岳e火山灰(Ko-e:上部腐植土1,700±130yrBP)を確認したとされる(木古内町教委1974)。しかし、昭和60(1985)年の当センターによる同遺跡の調査で、鉱物組成や火山ガラスの形態・屈折率などの分析から、この火山灰はKo-eではなくB-Tmに対比されることが明らかになった(北埋調報34)。また、この地域で従来Ko-eとされてきた火山灰は、B-Tm以外に渡島大島火山灰b層(Os-b:純縄文時代以降、基底部1,200±35yrBP)を誤認したものも含まれるという指摘がある(花岡1992)。現在では、Ko-eは駒ヶ岳ではなく遠隔の火山を起源とする可能性が高いとされている。

A地区南東側の低湿部は、Ⅵ層が還元により変化したと推測される灰白色粘土層を基盤とする。その上部には、沢の流水によって丘陵や段丘から運ばれた砂利層が20~30cmと厚く堆積している。この灰白色粘土-砂利層は伏流水に富み、常に水が滲み出している。低湿部では斜面部の遺物包含層であるⅢ・Ⅳ層は見られない。ただし、沢の兩岸の落ち際にはⅣ層の二次堆積土(Ⅳ'層)が厚く堆積していた。砂利層の上部はⅡ層の腐植土で、内部にも透水層がある。このⅡ層土は泥炭化が進んでおり、アシや灌木類などの植物遺体が多量に混在していた。最上部はⅠ層であるが、前述のように地形改変が行われたため、本来の表土は客土(ズリ)の下敷きになっていた。

(3) 基本土層

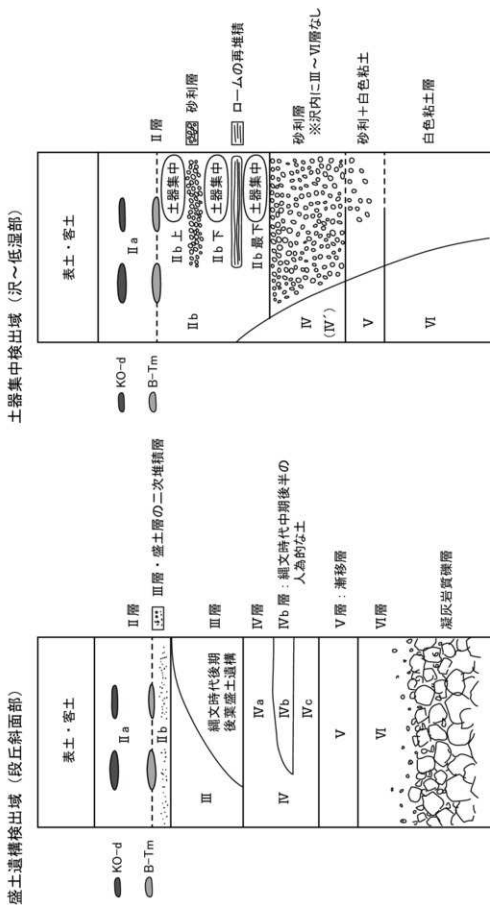
札苅7遺跡の基本層序は、先行する札苅6遺跡に則り、その後の調査で新たに得られた知見により、必要に応じて一部を改変した。図中土層注記の記載にあたっては、『新版標準土色帖』14版(小山・竹原1994)の「土色(マンセル表色系)」、「土壌調査ハンドブック」(日本ペドロジー学会編1997)の「土性」「粘着性」「ち密度」を用いた。基本土層柱状図(図Ⅲ-5)は、A地区の土器集中検出域(沢~低湿部)と盛土遺構検出域(段丘斜面部)の層位が著しく異なるため、別個に作成している。遺跡全体の土層断面については、『札苅7遺跡(1)』(北埋調報368)を参照いただきたい。なお、(1)の基本土層の記述と若干異なる点があるが、本書を最終報告とする。

Ⅰ層: 黒~暗褐色土(10YR 2/1~3/4) 層厚10~40cm(A地区低湿部では1.5m前後)。

表土。自然堆積の腐植土のほか、耕作土、客土など近代以降の人為的な土壌を含む。遺跡全体で道南杉の植林が行われており、攪乱の一部はⅥ層まで及ぶ。杉や笹の根を多く伴う。

Ⅱ層: 黒色土(10YR 1.7/1) 層厚20~50cm。

腐植土層。縄文時代晩期以降の遺物包含層。沢の内部や低湿部、遺構覆土、風倒木などのⅡ層中に白頭山-苦小牧火山灰(B-Tm:10世紀降下 10YR 6/4にぶい黄褐色)、駒ヶ岳d火山灰(Ko-d:1640年降下 10YR 8/2灰白色)が見られる。B-Tmを挟み上下に区分し、上位をⅡa層、下位をⅡb層とした。同晩期前半の土器集中はⅡb層中に形成されている。砂利層を内包することがあり、調査では上下に分層した。また、土器集中1の一部のみであるが、Ⅱb下層中にロームの再堆積



図Ⅲ-5 基本土層柱状図

土が見られたことから、これより下位をⅡb最下層とした。よって、土器集中の遺物の出土層位の「上層」はⅡb上層、「下層」は最下層が見られない部分および最下層より上位のⅡb下層、「最下層」はⅡb最下層を指す。Ⅱa層は無遺物層で、K o - d がごく稀にしか確認されなかったことから、特に分層はしなかった。

Ⅲ層：暗褐色土(10YR 3/4)層厚10~20cm(盛土遺構では最厚120cm)。

標高の低い部分では赤褐~暗赤褐色を呈することがある。縄文時代後期後葉の遺物包含層。A地区北側では当該期の盛土遺構が形成されている。盛土遺構周辺の斜面に広く分布するが、そこから離れると次第に希薄になる。南東部の低湿地では堆積していない。B地区では道南杉の植林による攪乱を受け、遺構覆土を除きほは残存していなかった。Ⅲ層については次小節で再び述べる。

Ⅳ層：黒~暗褐色土(10YR 2/1~3/3)層厚20~70cm。

腐植土層。縄文時代後期後葉以前の遺物包含層。A地区北側の縄文時代中期後半の堅穴住居跡・土坑などが多く検出された部分では、上位からⅣa・Ⅳb・Ⅳcの3層に分けた。A地区西~南側およびB地区ではⅣb層が確認されなかったため、分層しなかった。斜面でのⅣ層の層厚は漸進し、下位ほど厚く堆積している。A地区西側の小沢内は特に厚く、沢尻(R・S6・7調査区付近)で約70cmに達していた。斜面下位や沢の内部ではⅥ層中の凝灰岩礫を多量に含む。

Ⅳa層…黒褐色土(10YR 3/2)層厚20cm。縄文時代後期後葉の盛土遺構またはⅢ層直下の層。

同中期末葉~後期前葉の遺物が多く出土する。

Ⅳb層…暗褐色土(10YR 3/3)層厚10~20cm。縄文時代後中期後半の盛土遺構または遺構掘り上げ土と推測される層。当該期の遺物が多く出土する。

Ⅳc層…黒~黒褐色土(10YR 2/1~2/2)層厚20~30cm。上記の人為層より下位の層。縄文時代中期前半の遺物が多く出土する。

V層：黒褐色~褐色土(10YR 3/1~4/4)層厚15~20cm。

漸移層。Ⅵ層のローム質土層が腐植化によりⅣ層へと漸変する。斜面下位や沢の内部ではⅥ層中の凝灰岩礫を多量に含む。遺物は出土していない。

Ⅵ層：黄褐色ローム質土(10YR 5/8)~灰オリブ凝灰岩礫層(5YR 5/2)。

本遺跡の地山を形成する。標高の高い、比較的傾斜の緩い部分ではローム層が安定しているが、急斜面や氾濫原では凝灰岩礫層や凝灰岩混じりのローム質土層となる。このため堅穴住居跡やフラスコ状土坑などの床面・坑底面に凝灰岩礫が露呈する例が見られた。遺物は出土していない。

(4) Ⅲ層の成因について

札苅6遺跡の報告では、Ⅲ層を「焼土を含む層、あるいは焼土の二次堆積層」とし、近隣の遺跡における「焼土様堆積」の類例を挙げている。また、これとは別に、人為的な焼土ではなく、冠水の影響によって赤褐色へと変化したと推定される土壌の例も認められることから、札苅6遺跡の「Ⅲ層」はこれらの要素が複合的に含まれている可能性があるとした(北埋調報301)。

本遺跡の調査により、このⅢ層についての推定が実証された。A地区北側で縄文時代後期後葉の盛土遺構が3か所、Ⅲ層に相当する層位で検出され、土層断面ではこの盛土層が斜面の下位へ流出してⅢ層へと変化する堆積状況が観察された。盛土層の大部分はⅣ~Ⅵ層土が掘り上げられたと考えられる褐~暗褐色土で、現地で形成あるいは廃棄された焼土を部分的に包含している。斜面上のⅢ層が赤褐~明赤褐色の焼土そのものではなく、焼土や炭化物を含む褐~暗褐色土であるのは、この盛土層を起源とするためと推測される。盛土遺構の主体部が調査範囲外にあるため詳細は不明であるが、札苅6遺跡の北側範囲外にも同様の盛土遺構が存在する可能性がある。

一方、札苅6遺跡の南東部で確認された「均質的な赤色の厚い層」は、本遺跡でも斜面下位や低地部分に分布する。この焼土に類似した赤色土壌は前述の盛土起源のⅢ層とは成因が異なると考えられる。①平面形が不整で、規模・範囲も不明瞭である、②断面形がレンズ状ではなく、潜り込み状態が見られる、③層界が明瞭で、熱の伝わった痕跡が見られない、④赤色土壌の部分に他の土がほとんど混入しない、⑤上面や内部に灰や炭化物を伴わない、などの特徴から、人為的な被熱によって形成された焼土ではなく、「擬似焼土」（北埋調報253）の可能性が高い。すなわち、地下水の上昇や沢水の流入・浸透・蒸発などの影響による土壌の風化・酸化作用で土色に変化したものと推測される。堅穴・住居跡や大型のフラスコ状土坑、風倒木痕などの覆土上位に見られる「Ⅲ層土」は、盛土からの流れ込み（二次堆積）のほか、その場で形成された「擬似焼土」も含まれるようである。

昭和48（1973）年の札苅遺跡の調査では、大規模な「焼土」が検出されている。縄文時代晩期の遺物包含層の「ほぼ最下部」で、当遺跡のⅢ層と同じ層位と推測される。長さ20.5m、幅5.0mの範囲で南北に傾斜をもって分布しており、中心に「赤褐色の純粋な厚い焼土」があるとされる。調査担当者はお出土遺物の分析などから土器焼場址と考えるのが妥当としている（木古内町教委1974）。昭和60（1985）年調査区でも、類似する「焼土」が45か所検出されている（北埋調報34）。この「焼土」が土器焼成遺構であったとするには、被熱による硬化面（火床）や多量の炭化材、焼成粘土塊の出土といった判断材料が欠落しているように思われる。また、前述の①～⑤に類似する特徴が見られることから、これらに「擬似焼土」が含まれていた可能性がある。

（5）B-TmとⅢ層の層序について

札苅6遺跡では、Ⅲ層の上位に「B-TmまたはB-Tm混じりの褐色土の堆積」が観察された。このため、B-Tm降下以降をⅡ層、それ以前をⅢ層としている。また、Ⅱ層中より縄文時代の遺物が多量に出土するが、本来の包含層ではなく、流れ込みによるものと推測している（北埋調報301）。

ところが、本遺跡でⅢ層が縄文時代後期後葉の盛土遺構を主な起源とすることが判明し、さらにⅡ層中のB-Tm下位より同晩期前半の土器集中が検出されたことにより、札苅6遺跡の基本層序との矛盾が生じた。Ⅲ層とB-Tmの間に同晩期以降の遺物包含層が存在することが明らかになったのである。土層断面の観察では、Ⅱ層の最下位に土器集中が形成されており、その土壌はB-Tmの上下から連続している。よって土器集中はⅡ層中の最も古い時期の遺構である。ただし、土器集中の下部にはⅢ層土が認められず、この部分では新旧関係は不明である。

本遺跡においても、Ⅲ層や盛土遺構の上部に、層厚10cm未満の「B-Tm混じりの自然堆積土」を確認している（北埋調報368）。遺構覆土への流れ込み（二次堆積）など特殊な場合を除くと、Ⅲ層や盛土遺構の直上に連続してB-Tmが堆積している例は見られない。上部のⅡ層中にB-Tmが確認できない部分が大半であるが、この薄い自然堆積土が土器集中の時期（縄文時代晩期前半）の遺物包含層（Ⅱb層）に相当すると考えられる。混入しているとされる火山灰は、層序の整合性、降下時期（10世紀）との時間差から、B-Tmではない可能性がある。盛土遺構の形成とB-Tm降下の間の時期に当てはまるのは、約3,000年前に降下したとされてきた駒ヶ岳f火山灰（K o-f、表層腐植土2,750±110 yrBP）がある。この薄層（Ⅱb層）は同晩期前半の土層なので、降下時期とは整合的である。しかし、K o-fは駒ヶ岳の東南東側に分布軸があり、現在のところ木古内町域では確認されていない。また、近年の調査・研究では、K o-f直下の腐植土層の年代測定結果（5,480～5,530±90 yrBP）から、約5,500年前を降下時期とする意見も出されている（吉本ほか2008）。Ⅱ層中に混入した盛土層またはⅢ層の二次堆積土に、より古い時期のテフラが含まれていた可能性もある。

3 周辺の遺跡

(1) 木古内町における発掘調査

令和5(2023)年現在、北海道教育委員会の遺跡台帳には、木古内町内で62か所の遺跡が登録されている。このうち34か所の遺跡について発掘調査が行われている。最初の本格的な考古学的調査は、昭和46～48(1971～1973)年に当時の北海道開拓記念館(現北海道博物館)が学術調査、昭和48(1973)年に木古内町教育委員会が国道228号線拡張に伴う緊急発掘調査を実施した札苺遺跡である。その後、昭和59～61(1984～1986)年に津軽海峡線建設事業、平成2～13(1990～2001)年に南渡島地区広域農道整備事業(渡島地区広域営農団地農道整備事業を含む)、平成21～25(2009～2013)年に北海道新幹線建設事業、平成23～令和元(2011～2019)年に高規格幹線道路函館江差自動車道建設事業など、大規模な開発事業に伴う緊急発掘調査が町教委と当センターにより続けられてきた。

事業別では、津軽海峡線建設関連の新道4遺跡、建川1遺跡、建川2遺跡、札苺遺跡、南渡島地区広域農道整備関連の蛇内遺跡、泉沢2遺跡、泉沢3遺跡、亀川2遺跡、亀川3遺跡、釜谷遺跡、釜谷4遺跡、釜谷5遺跡、大釜谷3遺跡、北海道新幹線建設関連の木古内遺跡、木古内2遺跡、大平遺跡、大平4遺跡、蛇内2遺跡、函館江差自動車道建設関連の大平遺跡、大平4遺跡、札苺5遺跡、札苺6遺跡、札苺7遺跡(本遺跡)、札苺8遺跡、幸連遺跡、幸連3遺跡、幸連4遺跡、幸連5遺跡、泉沢5遺跡、泉沢6遺跡、亀川5遺跡、釜谷8遺跡、釜谷10遺跡などが調査された。このうち札苺遺跡、大平遺跡、大平4遺跡は複数の事業原因により調査されている。これらの鉄道や道路の建設ルートは津軽海峡沿いの海岸段丘の縁辺部を通過しており、縄文時代の集落遺跡が多数調査されることになった。近年の発掘調査の成果に基づく、木古内町における遺跡の時期別の特徴については、当センターによる既刊の調査報告書(北埋調報305・329・362・369など)に詳述されている。

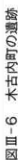
(2) 木古内町の縄文時代晩期遺跡

札苺7遺跡と同じく、発掘調査により縄文時代晩期の遺構・遺物が見つかった遺跡は、札苺遺跡、札苺5遺跡、札苺6遺跡、新道4遺跡、大平遺跡、大平4遺跡、蛇内2遺跡、泉沢2遺跡、亀川2遺跡、亀川5遺跡、釜谷10遺跡、大釜谷3遺跡などがある。このうち札苺遺跡、亀川2遺跡、釜谷10遺跡で当該期の住居跡が検出されたが、いずれも1、2軒と少ない。一方、札苺遺跡や大釜谷3遺跡では墓坑群が、本遺跡や大平遺跡では遺物集中が検出されるなど、墓域や廃棄域と推測される集落の一部が確認されている。以下、前葉、中葉、後葉の順に各遺跡の特徴的な遺構・遺物を挙げる。

晩期前葉

札苺遺跡の昭和60(1985)年度調査区で、当該期の土坑4基と「焼土」(疑似焼土か)45か所を検出した。また、晩期前葉の土器が出土し、札苺B式と仮称されている。調査担当者は「時期は高野V群土器の主体をなすものより古く大洞B式の比較的古い段階のものとみなされる」としている(北埋調報34)。また、同遺跡の昭和48(1973)年調査区からは、上ノ国式に相当する、瓜形文が口縁部に施された浅鉢が出土している(木古内町教委1974)。

大平遺跡の平成25(2013)年度調査区では、上ノ国式期の墓坑3基、土坑2基、焼土4か所が検出された。墓坑はいずれも上部に小礫の集中を伴う。このうち2基の坑底部からは土器・石器のほか漆塗り堅筒やサメ歯を利用した装身具などの副葬品が出土した。これらの墓坑は密集していることから、調査区外にも墓域が広がっていると推測されている。土坑2基は浅い皿状で、坑底面より一括土器が出土した。これらも近接しており、別の分布域をもつ可能性があると考えられる。焼土は墓坑群と土坑群の間に分布している。非常に狭小な調査範囲ではあるが、調査担当者は「西から墓坑群、焼土群、土坑群と遺構毎に集中域があるようにみえた」としている(北埋調報329)。



表Ⅲ-1 木古内町遺跡一覧(1)

遺跡番号	遺跡名	所在地	立地(緯度・経度)	種別	主な時期	主な遺構	調査年度	調査報告書
B-05-01	新道	新道 国道109-1(旧道)	海段長109-1(旧道)	遺跡(石造物)	縄文			
B-05-02	大谷谷	大谷谷(1)~(3)区	海段長199~200m	遺跡(石造物)	縄文中~縄文			
B-05-03	木古内	木古内(6)~(8)区	海段長197~201m	集落跡	縄文中~中世、新石器、近世	惣穴住居跡、フナコ牧土坑、Tピット、礎土	2010~2011	遺文2011
B-05-04	札司	札司(1)~(3)区	海段長197~201m	遺跡(石造物)	縄文中~中世、新石器、近世	惣穴住居跡、惣穴牧土坑、土坑、礎土	1971~1973 1973	町史第1974 紀元前1975
B-05-05	札司	札司(1)~(3)区	海段長197~201m	遺跡(石造物)	縄文中~中世、新石器、近世	惣穴住居跡、惣穴牧土坑、土坑、礎土	1983	遺文2010
B-05-06	新道	新道 国道109-1(旧道)	海段長197~201m	遺跡(石造物)	縄文中~中世、新石器、近世	惣穴住居跡、惣穴牧土坑、土坑、礎土	1991~1993	町史第1999
B-05-07	新道	新道 国道109-1(旧道)	海段長197~201m	遺跡(石造物)	縄文中~中世、新石器、近世	惣穴住居跡、惣穴牧土坑、土坑、礎土	2009~2011・2013	遺文2011・2016・2017
B-05-08	新道	新道 国道109-1(旧道)	海段長197~201m	遺跡(石造物)	縄文中~中世、新石器、近世	惣穴住居跡、惣穴牧土坑、土坑、礎土	2000	町史第2004
B-05-09	新道	新道 国道109-1(旧道)	海段長197~201m	遺跡(石造物)	縄文中~中世、新石器、近世	惣穴住居跡、惣穴牧土坑、土坑、礎土	1996	町史第1997
B-05-10	新道	新道 国道109-1(旧道)	海段長197~201m	遺跡(石造物)	縄文中~中世、新石器、近世	惣穴住居跡、惣穴牧土坑、土坑、礎土	1997~2002	町史第1999・2004
B-05-11	新道	新道 国道109-1(旧道)	海段長197~201m	遺跡(石造物)	縄文中~中世、新石器、近世	惣穴住居跡、惣穴牧土坑、土坑、礎土		
B-05-12	新道	新道 国道109-1(旧道)	海段長197~201m	遺跡(石造物)	縄文中~中世、新石器、近世	惣穴住居跡、惣穴牧土坑、土坑、礎土		
B-05-13	新道	新道 国道109-1(旧道)	海段長197~201m	遺跡(石造物)	縄文中~中世、新石器、近世	惣穴住居跡、惣穴牧土坑、土坑、礎土		
B-05-14	新道	新道 国道109-1(旧道)	海段長197~201m	遺跡(石造物)	縄文中~中世、新石器、近世	惣穴住居跡、惣穴牧土坑、土坑、礎土		
B-05-15	新道	新道 国道109-1(旧道)	海段長197~201m	遺跡(石造物)	縄文中~中世、新石器、近世	惣穴住居跡、惣穴牧土坑、土坑、礎土		
B-05-16	新道	新道 国道109-1(旧道)	海段長197~201m	遺跡(石造物)	縄文中~中世、新石器、近世	惣穴住居跡、惣穴牧土坑、土坑、礎土		
B-05-17	新道	新道 国道109-1(旧道)	海段長197~201m	遺跡(石造物)	縄文中~中世、新石器、近世	惣穴住居跡、惣穴牧土坑、土坑、礎土		
B-05-18	新道	新道 国道109-1(旧道)	海段長197~201m	遺跡(石造物)	縄文中~中世、新石器、近世	惣穴住居跡、惣穴牧土坑、土坑、礎土		
B-05-19	新道	新道 国道109-1(旧道)	海段長197~201m	遺跡(石造物)	縄文中~中世、新石器、近世	惣穴住居跡、惣穴牧土坑、土坑、礎土		
B-05-20	新道	新道 国道109-1(旧道)	海段長197~201m	遺跡(石造物)	縄文中~中世、新石器、近世	惣穴住居跡、惣穴牧土坑、土坑、礎土		
B-05-21	新道	新道 国道109-1(旧道)	海段長197~201m	遺跡(石造物)	縄文中~中世、新石器、近世	惣穴住居跡、惣穴牧土坑、土坑、礎土		
B-05-22	新道	新道 国道109-1(旧道)	海段長197~201m	遺跡(石造物)	縄文中~中世、新石器、近世	惣穴住居跡、惣穴牧土坑、土坑、礎土		
B-05-23	新道	新道 国道109-1(旧道)	海段長197~201m	遺跡(石造物)	縄文中~中世、新石器、近世	惣穴住居跡、惣穴牧土坑、土坑、礎土		
B-05-24	新道	新道 国道109-1(旧道)	海段長197~201m	遺跡(石造物)	縄文中~中世、新石器、近世	惣穴住居跡、惣穴牧土坑、土坑、礎土		
B-05-25	新道	新道 国道109-1(旧道)	海段長197~201m	遺跡(石造物)	縄文中~中世、新石器、近世	惣穴住居跡、惣穴牧土坑、土坑、礎土		
B-05-26	新道	新道 国道109-1(旧道)	海段長197~201m	遺跡(石造物)	縄文中~中世、新石器、近世	惣穴住居跡、惣穴牧土坑、土坑、礎土		
B-05-27	新道	新道 国道109-1(旧道)	海段長197~201m	遺跡(石造物)	縄文中~中世、新石器、近世	惣穴住居跡、惣穴牧土坑、土坑、礎土		
B-05-28	新道	新道 国道109-1(旧道)	海段長197~201m	遺跡(石造物)	縄文中~中世、新石器、近世	惣穴住居跡、惣穴牧土坑、土坑、礎土		
B-05-29	新道	新道 国道109-1(旧道)	海段長197~201m	遺跡(石造物)	縄文中~中世、新石器、近世	惣穴住居跡、惣穴牧土坑、土坑、礎土		
B-05-30	新道	新道 国道109-1(旧道)	海段長197~201m	遺跡(石造物)	縄文中~中世、新石器、近世	惣穴住居跡、惣穴牧土坑、土坑、礎土		
B-05-31	新道	新道 国道109-1(旧道)	海段長197~201m	遺跡(石造物)	縄文中~中世、新石器、近世	惣穴住居跡、惣穴牧土坑、土坑、礎土		
B-05-32	新道	新道 国道109-1(旧道)	海段長197~201m	遺跡(石造物)	縄文中~中世、新石器、近世	惣穴住居跡、惣穴牧土坑、土坑、礎土		

表Ⅲ-2 木古内町遺跡一覽(2)

[illegible]

その結果、本年度の「日本経済新聞」は、本年度の「読者」は、読者の

[illegible]

●調査制作費については巻末の引用文献文庫を参照のこと。

晩期中葉

札苺遺跡の昭和46～48(1971～1973)年度調査区で、当該期の堅穴住居跡2軒、墓坑60基、集石2か所、「焼土」(擬似焼土)1か所を検出した(木古内町教委1974、北海道開拓記念館1976)。住居跡はいずれも平面形が円形で、壁面に沿って周溝を巡らし、床面の中央に土器埋設炉を有する。出土遺物から、1号住居址は前半の大洞C₁式期、2号住居址は後半の大洞C₂式期と推測されている。1号住居址床面出土の炭化材による放射性炭素年代測定では、 $2,650 \pm 120 \text{yrBP}$ という数値が得られた。墓坑の平面形は隅丸方形を呈するものが多く、ほかに小判形、楕円形などがある。規模から大半が屈葬されたと考えられており、一部の大型のもの(長軸長150cm以上)については伸展葬の可能性が指摘されている。残存する人骨(歯)から頭位が判明したものは少ないが、小墓域(Ⅰ・Ⅱブロック)により東頭位と西頭位に分かれると推測されている。墓坑のうち35基に「砂利ブロック」と呼ばれる上部構造が見られ、19基の坑底部にベンガラが散布されていた。坑底部に柱穴状あるいは溝状の小土坑といった「付帯遺構」を有するものもある。副葬品は小型の壺・鉢・付付鉢・浅鉢の完形土器、石鏃、ヒスイ製玉、石刀、土製有孔円盤、サメ歯などが出土した。集石は下部に土偶を多く伴うことから、祭祀的性格が想定されている。遺跡より出土した当該期の土器は、東北部の亀ヶ岡式土器との比較検討から、大洞C₁式に相当する札苺第Ⅰ群土器、大洞C₂式に相当する札苺第Ⅱ群土器が設定された。また、小型の板状土偶で、顔面や体部の表現が簡略化・省略されているものが多数出土した。調査担当者の野村崇氏は、これらの破損部位を検討し、「本来、完形品として作られた土偶が、ある一定の役割を担わされて破壊される儀式的存在」を推定している(野村1976)。

大釜谷3遺跡B地区では38基の墓坑が検出され、ヒスイ製玉、藍胎漆器や糸玉状、環状、紐状の漆製品、石鏃などが出土した。これらの墓坑は2つの小墓域(A・B墓域)に分かれて分布する。平面形は楕円形または隅丸方形を呈するものが多い。坑底に周溝を設け、その内部に柱穴を巡らせるものが7基あり、木棺状の施設を有していたと推測されている。また、覆土の上部や坑底に玉砂利やロームが堆積する墓坑が10基ある。上部の玉砂利層にベンガラを含有する例も見られる。藍胎漆器は、生漆地に赤漆で弧線や蛇行線を組み合わせ、いわゆる「雲形文」が内外両面に描かれている。これらの墓坑は札苺遺跡とほぼ同時期と考えられるが、長軸方向や規模、付属遺構、ベンガラ散布の有無、副葬品の組み合わせなどに類似点と相違点が見られる(木古内町教委2003)。

大平4遺跡では、土坑が平成21(2009)年度調査区(本線部分)で2基、平成22(2010)年度調査区(町道振替部分)で1基の合計3基検出された。いずれも平面形が楕円形で、覆土が埋め戻されている。このうち1基の坑底面からは、札苺第Ⅱ群に相当する小型の壺形土器が横倒しの状態で出土した。これらの土坑は、規模・形態などから当該期の墓と推測されている(北埋調報280・292)。

釜谷10遺跡では、焼土を中心とする環状の柱穴群(H-2)が検出され、「掘り込みのない(浅い?)住居跡」と認定された。遺物などを伴っていないが、焼土出土の炭化材の放射性炭素年代測定値が $2,640 \pm 20 \text{yrBP}$ であったことから、縄文時代晩期の遺構と考えられている(北埋調報344)。この年代測定値は札苺遺跡の1号住居址と近似しており、構築時期は晩期中葉であろう。

札苺6遺跡では、「晩期以降に形成された遺構」として土坑2基が検出された。平面形は円形と隅丸方形のものがある。後者の覆土下位～坑底部は小砂利を多量に含み、埋め戻されている。これは前述の大釜谷3遺跡で検出された土坑と共通する特徴であり、ほぼ同時期のものと考えられる。また、縄文時代中期後半～後期前葉の堅穴住居跡の廃絶後のくぼみに当該期の遺物が多量に廃棄されており、隣接する本遺跡A地区の土器集中と類似した性格をもつ可能性がある(北埋調報301)。

新道4遺跡の平成27(2015)年度調査区(L地区)では、土坑1基、焼土1か所を検出した。焼土

は縄文時代後期後葉の堅穴住居跡が埋没する過程のくぼみに形成されている。焼土上面の土壌をフローテーション処理したところ、髪針の体部破片とみられる鹿角製の骨角器や多量の焼骨が得られた。焼骨はサケ科・ニシン科・ツノザメ科などの魚類、シカなどの陸獣類や海獣類、ウミガラス属などの鳥類などがあり、当該期の生業・獲得食料を伺うことができる。また、炭化材を用いた放射性炭素年代測定（AMS法）では、 $2,830 \pm 20 \text{yrBP}$ という数値であった。この焼土よりやや上位の住居覆土中からは、大洞C₂式相当の札苅第Ⅱ群土器が多量に出土しており、まとまって廃棄されたものと推測されている。このほか特徴的な遺物としては、弓状の象嵌土製品やS字状入組文が施された石刀などが出土している（北埋調報320）。過年度の調査区でも当該期の遺物は多く出土しており、札苅第Ⅱ群から尾白内Ⅰ群に相当する晩期後半の土器が1～6群に細分されている（北埋調報52）。

泉沢2遺跡A地点では、遺物包含層より札苅第Ⅱ群に相当する小型の壺形土器が出土した。これに伴って黒色の土製平玉が46点（1点は破損品）出土しており、約1/3に焼けハジケが見られるとされる。調査担当者は、鉄分を多く含む胎土で低温焼成し、意図的に「黒色」を呈するように製作したのと考えており、縄文時代晩期の人々の精神生活の中に、「赤色」に対する意識と同様に「黒色」に対する意識も存在したことを示す、補完的な資料である。と指摘している（木古内町教委 2003）。

亀川5遺跡では、土坑1基、焼土1か所が検出された。遺物を伴っていないが、周辺の出土遺物から聖山Ⅰ～Ⅱ式期のものと推測されている（北埋調報332）。

晩期後葉

亀川2遺跡では、住居跡1軒が検出された。円形の石組炉と焼土、柱穴3基が確認されたが、攪乱により全体の規模・形状は不明である。周辺からは大洞A式に並行する湯の里6遺跡Vc類土器（北埋調報18）が多く出土しており、住居跡もこの時期のものと考えられている。このほか札苅第Ⅰ群、札苅第Ⅱ群に相当する土器も少量出土している（木古内町教委 1998）。

蛇内2遺跡では、遺構は検出されていないが、包含層より湯の里6遺跡Vc類土器が少量出土した。縄文時代前～後期の遺構・遺物が集中する段丘の平坦面には全く見られず、南西辺の沢内でのみ出土していることから、主体部は調査範囲外にあったと推測されている（北埋調報281）。

札苅5遺跡の平成23（2011）年度調査区では、包含層より大洞A式に相当すると考えられる、工字文が施された土器片が少量出土した（北埋調報294）。

大平遺跡の平成22・23（2010・2011）年度調査区では、縄文時代前期末葉の堅穴住居跡の覆土上位より大洞A～A'式に相当する時期の遺物が多量に出土し、埋没過程にある住居跡のくぼみに廃棄されたものと推測される。この遺物集中は擦文文化期の遺構に攪乱されており、その覆土中や周辺の包含層からも晩期後葉の遺物が出土している。調査担当者により、当該期の土器は文様構成から大きく2群に分けられた。すなわち、文様帯が口縁部と体部に分かれ、横位連続工字文が施されたⅠ群土器と、口縁部と体部の文様帯が合体し、横位連続工字文・工字文・変形工字文が施されたⅡ群土器である。このうちⅡ群は浅鉢の口縁部に見られる「Y」字状・「V」字状の大型突起が特徴的である。東北部との対比から、工字文・変形工字文系土器と在地系土器を含むⅡ群を「大平式」と呼称し、尾白内Ⅰ群土器に後続し、水川式よりも古い土器群として位置付けている（北埋調報328）。

同じ大平遺跡の平成25（2013）年度調査区では、小土坑1基と土器捨て場が検出された。小土坑は柱穴状で、覆土上位に鉢・台付鉢3個体が伏せた状態で重ねられていた。土器捨て場および周辺の包含層からは、縄文時代晩期後葉の比較的新しい時期の土器が平面的なまとまりをもって出土した。調査担当者は、大平遺跡や道南地方の遺跡の出土例を用いて、当該期の聖山式以降の土器をⅠ～Ⅵ期に編年している。すなわち、聖山式の最も新しい段階とされる「武佐川・日ノ浜8号段階」（福田

2003)をⅠ期、大平遺跡の古手の要素をもつもの(鉤状沈線の沈線文、交互弧線文など)をⅢ期、新しい要素をもつもの(口縁部突起の大型化や文様の沈線化など)をⅤ期とし、その前後に当てはまるⅡ・Ⅳ・Ⅵ期を想定している。また、石狩低地帯や噴火湾沿岸の出土例から、文様や器種組成での相互の影響と地域差、その後の在地化の進行を推測している(北埋調報329)。

(3) 札苺地区の遺跡

令和5(2023)年現在、札苺地区で埋蔵文化財包蔵地として確認されているのは、札苺7遺跡を含めて9遺跡ある(図Ⅲ-7)。このうち、札苺遺跡、札苺5遺跡、札苺6遺跡、札苺7遺跡、札苺8遺跡が学術発掘または緊急発掘により調査されている。一方、札苺2遺跡、札苺3遺跡、札苺4遺跡、札苺9遺跡は未発掘である。以下、本遺跡を除く、これまでに発掘調査された4遺跡について記す。

札苺遺跡(登載番号B-05-4)

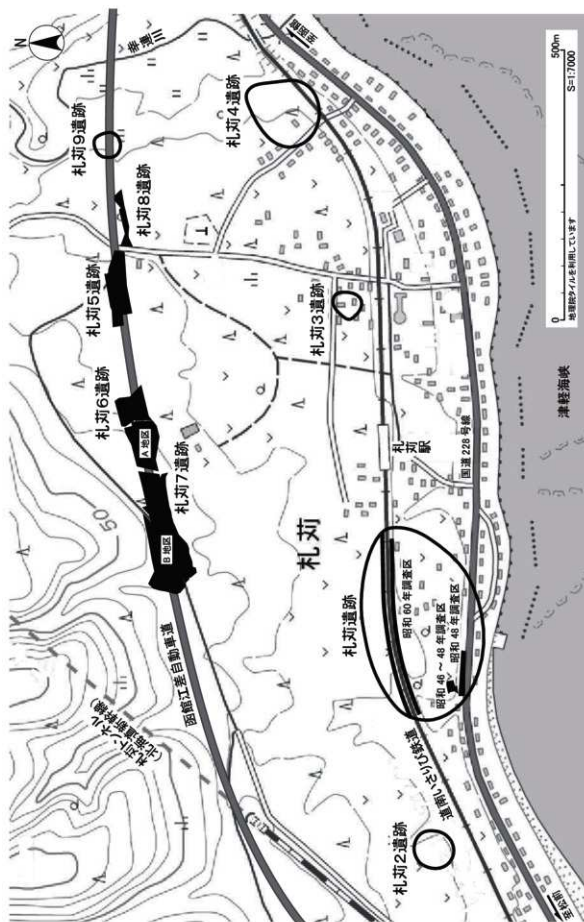
札苺地区の集落の西側、大調川と無名の沢に挟まれた標高7.0~11.0mの低位の海成段丘上に立地する。遺跡は古くから珍奇な遺物が出土する地として知られていたらしい。明治21(1888)年9月刊行の『東京人類学雑誌』第3巻31号には、札苺地区にある神社の御神体として祀られていた石棒についての伝聞と、この付近で永田方正が採集した石刀が紹介されている(坪井1888)。その後、昭和40(1965)年ごろ、地元出身の高校生グループが札苺地区で採集した遺物が、市立函館博物館で当時学芸員であった吉崎昌一氏のところへ持ち込まれた。吉崎氏は遺物の出土状況を聞き取り、札苺地区に縄文時代晩期の墳墓遺跡があるのではないかと推定していた。

昭和46(1971)年4月に開館した北海道開拓記念館は、考古部門の課題を「北海道先史時代の編年と地域性を示す資料の調査収集」と設定し、札苺遺跡を調査研究の対象とすることにした。発掘調査は同館学芸員中村章氏・野村崇氏・中田幹雄氏・森田知忠氏らにより、昭和46~48(1971~1973)年の毎年10月に3次にわたって実施された(北海道開拓記念館1976)。この一連の学術調査が行われている中、昭和48(1973)年に国道228号線の拡幅工事に伴う緊急発掘調査が、北海道開発局函館開発建設部より木古内町教育委員会へ委託された。実際の調査は町教委より北海道開拓記念館へ委嘱され、同年4月に野村崇氏を担当者として実施された(木古内町教委1974)。また、昭和60(1985)年、津軽海峡線連絡設備新設工事に伴う発掘調査が、日本国有鉄道(当時)から委託された財団法人北海道埋蔵文化財センターにより実施された(北埋調報34)。

以上の発掘調査が行われた面積の合計は2,889㎡で、広大な遺跡のごく一部に過ぎない。また、昭和46~48(1971~1973)年調査区と昭和60(1985)年調査区は80~100m離れているため、遺跡の全体を把握することは困難である。それでも遺跡からは堅穴住居跡4軒(縄文時代中期1・同後期1・同晩期2)、土坑67基(うち墓62基:同晩期60・中世1・近世1)、集石3か所(いずれも晩期)などの遺構や、縄文時代前期~統縄文時代の多数の遺物が検出されており、内容の濃密さがうかがえる。このうち主体となるのは同晩期中葉で、調査成果の概要は、前小節で述べたとおりである。札苺遺跡では居住域・墓域・祭祀域など当該期の「札苺ムラ」の集落構造の一部が確認されており、同時期の土器集中(廃棄域)が検出された本遺跡との関連が想定される。札苺遺跡は北海道における亀ヶ岡文化研究の嚆矢となった、学史上きわめて重要な位置を占める遺跡といえる。

札苺5遺跡(登載番号B-05-48)

札苺地区の北東側、幸連川支流右岸の、標高15.0~20.0mの段丘上に立地する。札苺7遺跡と同様に、高規格幹線道路函館江差自動車道建設工事に伴う試掘調査で発見された遺跡である(1章第3節参照)。平成23(2011)年度に3,393㎡、平成29(2017)年度に770㎡の合計4,163㎡が当センターにより発掘調査された。その結果、縄文時代前期後半を主体とする遺構・遺物と旧石器時代後期の石器



図III-7 札苅地区の遺跡

群が確認された。遺構は、堅穴住居跡12軒、土坑6基、Tピット6基、柱穴状小土坑127基、焼土17か所、フレイク・チップ集中5か所が検出されており、調査区東側の幸連川支流を望む段丘の縁辺部に集中する。調査担当者は、津軽海峡周辺での堅穴住居跡の掘出事例から、札苅5遺跡の集落は円筒土器下層c～d1式を主体とする時期と推測している。Tピットのうち4基は弧状に列を成して分布する。柱穴状小土坑は、居住域と区画するための杭列、あるいはTピットに関連する柵列の可能性が指摘されている。遺物は、縄文時代の土器・石器・礫や旧石器など合計35,787点が出土した。土器は縄文時代早～晩期の各時期にわたるが、住居跡と同じ同前期後半のものが最も多い。旧石器は美利河型細石刃核を含む石器群で細石器・石刃・削器なども出土している（北埋調報294・353）。

札苅6遺跡（登録番号B-05-49）

札苅地区の北側、標高17.0～24.0mの、後背の丘陵から続く比較的平坦な段丘面に立地する。札苅7遺跡と同様に、高規格幹線道路函館江差自動車道建設工事に伴う試掘調査で発見された遺跡である（1章第3節参照）。平成23（2011）年度に2,758㎡が当センターにより発掘調査された。その結果、縄文時代中期前半と同後期前葉を主体とする集落跡が確認された。遺構は調査区西側（札苅7遺跡側）に多く分布しており、堅穴住居跡13軒、土坑71基、焼土20か所、埋設土器3基、遺物集中5か所、フレイク・チップ集中3か所が検出された。住居跡は縄文時代中期前半（サイベ沢Ⅷ式～見晴町式期）が6軒、同後期前葉（トリサキ式～白坂3式期）が7軒（堅穴状遺構を含む）である。土坑の時期は縄文時代前～晩期であるが、同中期前半を主体とする推測されている。埋設土器は縄文時代前期後半（円筒土器下層b～c式）と同中期後半（複林式、大安在B式～ノダツⅡ式）である。遺物は、土器・石器・礫など合計196,606点が出土した。土器は縄文時代前～晩期、続縄文時代のものがあるが、特に中期前半と後期前葉のものが多く、石器は各器種見られるが、扁平打製石器の出土地点数が際立っている。土製品は土偶の破片、石製品は三脚石器（三角形石製品）、大珠などが出土した（北埋調報301）。札苅6遺跡は、遺構の分布や出土遺物などから、隣接する札苅7遺跡A地区と同一の遺跡面を形成していたと考えられる（北埋調報368）。

札苅8遺跡（登録番号B-05-56）

札苅地区の北東側、幸連川支流右岸の、標高11.0～14.0mの段丘上に立地する。札苅7遺跡と同様に、高規格幹線道路函館江差自動車道建設工事に伴う試掘調査で発見された遺跡である（1章第3節参照）。平成26（2014）年度に832㎡が当センターにより発掘調査された。その結果、縄文時代前期後半を主体とする集落跡が確認された。遺構は、堅穴住居跡5軒、土坑9基、Tピット1基、焼土2か所、盛土遺構2か所が検出された。遺構の時期は、縄文時代後期前葉の住居跡2軒、同早期前半の土坑1基を除き、概ね同前期後半と考えられている。盛土遺構は、調査区中央部のM-1が円筒土器下層b式主体、西側のM-2が円筒土器下層d1式主体と時期差がある。遺物は、縄文時代の土器・石器・礫や旧石器など合計307,945点が出土した。これらの大半は盛土遺構から出土している。土器は縄文時代前期後半の円筒土器下層式が約97%を占める。石器等は頁岩製のフレイク・チップ、U・Rフレイク石核が多い。旧石器は美利河型細石刃核を含む石器群で細石刃・石刃・搔器・削器なども出土した。札苅5遺跡とは西側の町道幸連1線を挟んで隣接し、遺構の時期・立地や出土遺物などから、一体の遺跡であったと捉えられている（北埋調報362）。

札苅地区の遺跡は、発見順に登録されるため遺跡としては別になっているが、これまでの調査成果から、集落としてのまとまりは、A群：札苅5遺跡と札苅8遺跡、B群：札苅6遺跡と札苅7遺跡A地区、C群：札苅7遺跡B地区（西側）、D群：札苅遺跡と捉え直すことができる。時期は、A群（縄文時代前期）→B・C群（同中～後期）→D群（同晩期）と変遷するようである。（芝田）